

す。私はお前方を見外すまいと思つて。走つて参りました」と煙草喫めば。七左衛門は「これ勘七。あれは見事な者ぢや。有馬で逗留の内。あれをばらして氣を晴した。ちと使つて見せう」と「こりや長兵衛爰へ來い」と呼寄せ「これ勘七あれは長兵衛というて懶發者ぢや。扱まだ我を折る事がある。この小四郎に戀をしらるゝ」。何を七左衛門様の悪い事ばかりか。小四郎聞き「こりや長兵衛。そちは俺が湯に入れば。後から背中へ抱附いたわ」。それは背中を流してくれと仰せられます故。流すとて手が觸りました。「イヤどうでも俺に惚れてゐるさうな。つけざしを飲まさう」と觸を長兵衛が口へ寄せて飲み給へば「恥しい事許りさつしやります。若衆は厭ぢや」といへば「そんなら女房はあるか」。あゝ女房はござります。「ム、其方に女房があるよな。是は聞かぬぢや。幾歳ぞ」。今年五十。「それは女房であるまい」。それでも爺父が女房どもくといはれました。「ヤイそれは其方を生んだ母親ぢや」。何れ死なれた時。餘程悲しかつた程に。親な事もござりませう。七左衛門可笑しく「汝は幾歳になる」。三十一でござります。「本に三十一か」。何の嘘を申しませう。外のお人様なら三十四とも五とも申しませうけれども。お前ぢや懸値なしに三十一にまけまする。「輕口をにやした」。この様な事

は有馬で七左衛門様の教へさつしやつた。「ヤイ長兵衛。汝が父親は幾歳ぢや」。私と同じ年。「親が同じ年か」。それでも三十一で死なれました。「これは聞えた。何をせられたぞ」。殿様の御代の時の鍵持。「名は何というた」。淨雲。「鍵持の名に淨雲とは」。それでも位牌に書いてあるもの。「それは戒名ぢや」。戒名は山田といふのに。「われがいふは苗字といふ物ぢや」。苗字とは六字のみやうじというて。南無阿彌陀佛の事ぢや。「それは名號といふ物ぢや」。名號といふは別題目の事ぢやに」といへば。人々は腹を抱へて笑ひ「まだ惣助殿は見えぬさうな。さう／＼も待つて居られぬ。よい／＼長兵衛に言傳を言置いて行かう。こりや旦那殿がござつたらば。此の間は有馬で緩々とお心やすう御意得ました。これにて待合せお暇を申さうが。急用が出来まして。宿へも歸らず直にこれから参ります。宿元は有馬でお咄し申しました通り。本町筋。濱側より三丁目。暖簾に尾の道屋と書いて置きました。酒林の出た。隠れのない家でござります。お通りにはお訪ねに預りませうと申して給れ」。小四郎もお言傳申したと懇にいうてたも。阿呆聞き「そんなら皆様とこれから分れますか。お名残り惜しい。どうやら涙が零るゝ」。オ、しほらしい。さらば」と七左衛門小四郎は勘七諸共。廓へこ

そは行きにける。其の跡へ三宅彦六は。疵養生のため。有馬の湯に入り本腹し駕籠に乗つて居る。長兵衛見て「旦那様遅うござりました」「おのれは身が駕籠には附かずして。何ぞ喰ひたさに先の駕籠に附いて来たか。シテ七左衛門殿は何處にぢや」「遅さに行かしました」「これはしたり」と。駕籠より下り駕籠を返し「町人といふ者はじたらくな。心易う咄したに。暇乞もせずに行く」「イヤ言傳がござります」「それをぬかせ。サアなんとぢや」阿呆畏り「此の間は有馬で心易う。忝う互にござります。これで暇乞をせうと思へども。用が出来たに依つて。無念ながら参ります。所は有馬でお前に申した通りぢや程にと。懇におつしやりました」「さてもうたりく。所は何處ぢやと云はれたぞ」「お前に言うておいたと」「サア俺は聞いて覚えてるれども。汝が忘れてるながら。惻口さうに吐す。吐せ」「所は三丁目本町」「ム、これはよい。家名はどうぢや」「家名は暖簾に書いてある」「サア何と書いてあるぞ」「それは書いてはおいたれども。ちと遠慮で。隠すとおつしやりました」彦六可笑がり「尾の道屋であらうが」「それく尾の道屋といへば」「たわけめが」と杖ふり上ぐれば逃けて退く。彦六は「エ、ひよんな。俺が惣助と名を變へ。有馬で心易う咄したも手前者どもと見た故。附いて

来て様子をいうて。銀をも借らうと思つて。連立つて戻つたに。別れうなら矢張り有馬にゐるものを。そちが有馬へ来る時米はあつたか」阿呆聞き「参ります四五日前に。又五升買ひましたけれども。参りますさかいで皆になります」「殿は何と申してござるぞ」「銀が四貫匁なれば廓へ行き腹を切つて死ぬる。お前が戻らしやつたら。何卒才覺がならう程に。早う呼び来ていとあつて。私が呼びに参りました」彦六聞き「俺が戻つたとて。無い銀がどうして出ようぞ。痛う腹が減いた。使錢の餘りはないか」「十文餘りました故。お前に進ませせうと存じ。十文もりを買ひましたが。冷めれば悪いと存じ私が喰へました」「これはしたり。錢もなしに家へは歸られまい。よいく有馬でしておいた。思案の通りにせずばなるまい。此の所は輛の女郎川へ通ふ道筋なれば。何者でも銀を持つてゐさうな者が通らば剝いて奪り。喧ましういは斬殺すぞ」阿呆怖がり「私は御赦されませ。如何にしても脇差が切れぬ故。人を斬つても面目がない」「おのれに殺せではない。俺が殺す。何でも剝いで奪つて渡す物を。汝は取つて逃げよ」「逃げる事は得物でござります」「サア今からぢやぞ」「モなされませか。そんなら一寸歸りて物を喰へまして。洗足を致して参りませう」「十文盛を喰うて何がひだるい。臆

病者めが。そこを一寸でも歸ると。身が叩殺す」と杖振上ぐる所へ。廿歳あまりの女房。塗笠を被來りつゝ、「まづ御堪忍なされませ。ヤアそちは長兵衛ぢやないか。貴方は誰ぢや」「彦六様でござります」「ナウ私はおみつでござんすわいの。お顔が窺れて見違へました」「彦六見で。見知らぬ顔をすれば」「ハテこな様の女房ぢや」「身は女房は持たぬ」「何を云はしやんすぞいの。こな様の邸を出で給ふ跡で。父様の痛い詮議に逢うて。座敷牢へ入りました。便をせう事もならず。漸うと邸を脱出で。方々とお行方を尋ね。お前の有馬へござつた跡で民彌様に尋ね逢ひ。朝晩のしこしらへも。わしがして上げますも。皆こな様への奉公ぢや。それに女房はない見知らぬとは。あまり胸愍な詞ぢや」と。涙を流し宣へば。彦六は「ヤイ阿呆。汝が有馬でいふには。どれやら知らぬ女中が御座つて。働いてぢやというたは此の女の事か」「いかにも其のおみつ様でござります」「ム、其の心底なれば満足ぢや。殿はどうして御座る」「されば民彌様は道芝様の年は明いて。四貫匁の借銭さへ濟めば。殿と御夫婦にならしやれども。其の銀がない。これを外へ遣つては。腹を切らねばならぬと云うて。今日も廓へ往て御座る」「ム、そちと俺が中に娘が有つたが。それは何とした」「さればこな様の行方を方々と尋ねる中

に。貯への路銀は皆になり。爲う事なうて。さる所へ養子に遣りました。それで養子親の所へ行きどうぞ云うて銀でも。借つて來うかと思つて出ました」「ハテそれは惜しい事ぢや。それがあればどうぞ娘を賣りたらば。銀にならうものを俺が往て取返して來う」「イヤ、養子に遣る時。父親はないといふ手形をしたれば。こな様が親ぢやというて御座つては。ねちものになります。養子の所から又大名の所へ奉公に遣つたといひます」「そんなら其の遣つた大名の名を聞いておぢや。其の先へいうたらどうぞ銀になるまいでもない」「心得ました。これから近い所ぢや。問うて來ませう程に。戻る迄やはりこれにござんせ」と。女房は尋ねに行けば阿呆は「サアこの勢に歸りませう」「何をぬかす。剽盜をいやがり去なうや。兎角分別の通りにせずばなるまい。阿呆め何者でも通るか氣を注げよ」と橋の下へ隠れ兩人は煙草を呑みてる。所へ兩替屋の手代作兵衛は。四貫匁の銀を懐へ入れ。禿小傳を伴來り「これ俺は彼處へ寄つて行かねばならぬ。これから廓へ近い程に。獨り往きや」「そんなら其の銀を渡さしやんせ。請取つて参りませう」「心得た」と小判二兩取出しやれば「イヤまだござんす」「ハテそればかりぢや。残は脇へ行くのぢや」「イヤ、店で若い衆の言はしやんしたは。白い銀

の大きに包んだを二つと。小判をいかい事包んだのとを。皆一緒に持つて行きやと仰つた。「何をいふぞそればかりぢや」と振切り行くを。裾を捉らへ「その銀遣さしやれねば往なぬ。扱は其の銀は此方の盗らしやるの。誰ぞ人は御座らぬか」といふを。彦六聞き立出で。作兵衛が胸倉を取り「小さい子の銀をなぜ遣らぬ」と蹴倒し踏付け「銀を渡せ」ときめ附ければ。懐より取出すを。銀二包と金包を引取り「こればかりの筈か」禿見て「それでようござんす」といへば。彦六は懐へ押入れ「横着者めが。早う歸れ」作兵衛起上り「主が俺に渡した銀を。そちに遣らう筈がない。そちを旦那の所へつれて行く」「オ、行かう。汝は銀盗つて奔るを見附けて取返したといは。そちは盗人ぢやぞよ」作兵衛氣の毒がり「とかく俺が持行く銀ぢや。俺に渡せ」「どうでも受取るか渡さう」と銀取出し下に置き「サアそつとなりとも此の銀へ手を指いて見よ。腕骨を切りをる」と鑿元くつろけ睥附ければ。擬勢に恐れ「ハテそんならよいわ。受取らぬわ。さてをかしい事ぢや。俺が物せうとしたを。ツイ汝に物せられた。俺は厄年ぢや故構ひはせぬが。をかしい迄」と笑うて逃けて歸りける。禿は「ナウ嬉しや。其の銀を渡して下さんせ」「いや／＼小さい子は銀を持たぬものぢや。俺が持つて往てやらう」「そんな

らこちの所まで連立つて行きませう」「ハテ先へゆけといふに」と睥附ければ「合點が行かぬ。其の銀を奪りやるの」と阿呆を見て「ナウそなたは長兵衛殿か。これ此の人の。銀奪りやる。取返して下され」といへば彦六は「汝はこの子と近附か」阿呆聞き「先程これへ参ります途で。七左衛門様のお手代の佐兵衛殿が。その子を伴れて天王様へ詣つてござつた故。あれで遇ひました。小傳といふ麻の禿でござります」といへば。彦六聞き「こちらを知つた者なればとられまい」返さんと思ひ金を取り出せしが「イヤ／＼これがなうては殿が死なうといやる。欲しうもある」と思案をすれば禿は「よい／＼返しやらぬからは。宅へ戻つて七左衛門様に。長兵衛の伴が。銀を奪りやつたといふぞ」と走り行くを引捉らへ「盗みをしたといはれては立たぬ」と情なくも刺殺す。あゝ悲しやとばかりにて空しくなれば。死骸を橋の下へ押入れ。霞を伐り顔へかけ姿を隠し。刀の血を足袋を脱ぎ拭ひ取り。着物へ着きし血を手拭にて拭はせども。まだ見れば着物脱ぎ。下の布の當りし縞の着物を上へ着替へ「サア首尾はよい」と立歸る所へ。女房來り「こな様は痛う顔の色が悪いぞや。さて養子の親の所へ行き。なんほ訊ねてもいひませぬ故。其の隣へはひり訊ねたれば。憎い事ではないか。大名へ遣つたといふは嘘。輦の傾城

町へ禿に賣つて遣つたといひの。大事の一人の娘を何の禿奉公させうぞ。詮議して取返して下され」といへば。彦六氣味わるく「シテ娘は幾歳になる」。今年十一なれども大柄な。むつくりとして美しい子になりました。「名は何といふ」。今禿では小傳といひますけな。ハアと肝を消し「これ縦へ如何様な事があらうとも取亂すまいぞ。あの橋の下なるものを見ておじやれ」女房は橋の下へ行き「あゝ、惨や女の子が殺してある」。その顔を見知つてはるぬか。女房は「見たやうなが」とよく見「ナウ悲しやこれ娘ぢやわいの。何者が殺した。ヤイ長兵衛小傳は誰が殺したぞ」阿呆泣き「且那様の殺さしやつた」といへば。彦六にしがみ付き「これ氣狂ひ。親が子を殺すといふ事がある事か。娘を返しや返しや」と前後を亂し歎き「寧ろ俺を殺しや〜」といへば。阿呆聞き「こなさんは銀も持つてござらぬもの。何の殺さつしやろ」彦六心亂れつ「あゝ是非もない。先程殺す時。此の報が民彌殿へ行かすばよからうかと案ぜしが。身が娘なれば。主の爲に子を殺すは習ひぢや。こりや女房最早歎いても返らぬ事ぢや。ヤイ長兵衛。そちは此の銀を持ち。殿は廓に給ふとある。あれへ持行き此の銀を進ぜ。このおみつを宿へ伴れて歸りてから往け」長兵衛も涙ながら「畏りました」と銀を請取り「お歎きは

御尤ぢや。まづお歸りなされませ」と手を執れども。女房は「いや〜娘を殺し何の去なう。俺も死ぬる」と仆れ伏すを。長兵衛は引抱へ無理に伴れてぞ歸りける。さて彦六は娘の死骸を膝へ載せ「扱々人は邪慳なものぢや。最前そちを殺して銀を奪つた時は嬉しかつた。吾が子と知つて殺さうか。他人ぢやと思つて殺した。そちを他人にせよ。その親が聞いたら。この如くに悲しからう。人の心は惨いものぢや。そちが平産したと聞いたれども。今迄會つた事もないに。我が手にかけて殺して。死骸で對面するは何事ぞ」と。さしもの彦六心亂れ腰を抜かし。死骸を抱いて泣沈む。實に世の哀れの至極なり。

情の波を打寄する。戀つむ船の。輛の色里賑はしく。揚屋の臺所には。亭主與茂八は片肌ぬぎ。田樂を焙り立つれば。禿ども二階座敷へ持運ぶ。息子半平。娘あぐりは手傳ひする。禿ふでの。葎は雪轉をして来る。傾城大崎來れば。與茂八は「これお前のお遇ひなされますはお若衆様ぢや。御器量自慢で。其の上兩替屋で金持様ぢや。田樂の様に。裏表から焼いて遣らしやませ」大崎聞き「器量自慢さしやつたら。振つて〜振附けてやりませう」と二階へ上る。嫁お綱出で「これ忙しい。男どもは太夫様方をお迎に行け。吸物がよければ早う出さうぞ」と喧しう

いふ所へ。禿しやきんは「これお綱様。七様から道芝様へ此の文を持つて行きます」。「オ、早う行かしやれ」。「心得ました」と走り行く。與茂八は「これ太夫様方を呼びにやるは。揚屋から遣る作法ぢやに。お客から直に遣らするものか」と言ふところへ。太夫道芝島原風の八文字。繰出し歩みゆたかにて。共に亦なき風ぞかし。遣手たまは「これ與茂八様。なんほの太夫様にも附いたが。これ程きたいの悪い太夫様はない。四貫匁の借銀が濟まぬ故。債方からはせがむ。今もこゝへ来る横町で。若い衆が集つて。アレ道芝が。借錢の勸進に歩くといひます」

與茂八聞き「とかく今時は銀の出ぬ世界ぢや」といへば「いや〜太夫様の一言おとおつしやるは。銀はふります。此の中ちの旦那殿のいはしやるは。太夫が年さへ切増さば。四貫匁の銀は今でも出してやらうとおつしやる故。此の中わしが様々と意見しますれども。おとおつしやらぬ」與茂八聞き「それは合點なされぬ筈ぢや。尤も年を切増し給は。當分の借錢は濟まうが。年の明く時又借錢がでける。それでは又年を切増し〜したら。後には太夫様は婆にならしやる。腰が屈んで齒が脱けてからは。外へ御座る事もなるまい」また腹を立て「オ、こなたが太夫様に色々というて。腰押さつしやる。旦那様が逢うて禮を云はうと云うて。腹立て

てござるぞ」。「何をひとりして喧しういふぞ」。「喧しう言ふのが遣手の役ぢや」。「はて厄なら八幡へ参れ」。「ナニ俺をなぶりやるか」と腹を立つるを。禿其の外立ちかゝり。たまを引止め。無理に二階へ伴れ行く。扱與茂八は「これ太夫様。唯今七様からお文が参つたは。お前の借錢を濟して。伴れてござらうといふ事ぢや。それにお出なさるゝは。七様へ御座ります心得か」道芝聞き「ハテ成程行く心でござんす」。「そのお心なら何を申す事もないが。唯一つ申さう。お前の事は京の島原で道芝というて。御全盛な太夫様であつたれども。民彌様と深くお逢ひなされ。外の客が腹立て退いた故。年の内をこの輛へ賣つておこしました。互に深い御心底故。何卒御夫婦におなりなさるゝ様にと思ひ。十貫匁の借銀も。私が四貫匁で詫びましたも。何卒民彌様の手へ入る様にと思つて働きました。其の心を無にして七様へ行くとは。扱々無心中なその様な心は總嫁も持ちませぬ。いつそ飯炊をなされたがよい。もこれ迄ぢや何も申さぬ」と腹立て奥へ入らんとするを。太夫引留め「この事は廓を出さば云ふまいと思へども。餘り志が嬉しい故申します。何を隠さう七様に銀を出さし廓を出て。民彌様と添ふ心ぢや」。「ハテ藥袋もない。七様の銀出し給ふは。女房に持たう爲で御座ります」。「そこが思案ぢや。銀を濟しとん

と廊を出ると。七様は女房にせうとおつしやらう。その時私が言はうは。四貫匁の銀を借りましたは。女房にならうではござんせぬ。銀は借りました。追附け濟しませうといは。定めて言分になり。公事にも成るであらう。公事の相手に私になる意ぢや。是女郎の詐なれども。愛い民彌様に添ひたさぢや」と涙乍ら心底を咄せば「扱はさうしたお心か。兎角色を覺られぬ様に。泣いた振見せてはならぬ。顔を拭うてござりませ」と伴ひ二階へ上りける。小歌ありし辛さに懲りずも通ふ。土手の霜風身にしみくと。雲交りに降りくる。雪のさし傘手もたゆく。徒はだしえ。それは誰がなすわざぞ。色に凍えて死なうなら。しんぞ此の身はなり次第。ハテそれ迄。紙衣一重に古編笠。民彌はしよんほりと揚屋の門に立ち。「與茂八くちよつと逢ひたい」といへど。大騒にて聞えず。そろく臺所へはひり「與茂八」と呼ぶ所へ。傾城大崎は「小歌の唱歌がない」と。二階より尋ねて下りる。民彌はつと思ひ行燈の蔭に隠れるしが。傍へ來れば其の儘火を吹消せば「これは火が消えた」といへば。禿は手燭とりに行く。民彌詮方なく。傍にある小袖を着。丸頭巾を被り。炬燵へ入り俯きる。所へ禿火を持來り行燈へ點せば。大崎こゝかしこ尋ね。民彌にあたり「これは誰様ぢや。壬生様か」といへば。かぶりをふる「そんなら伊八様であらう。伊八様なら鼻聲の筈ぢや」といへば。その儘鼻を撮み「伊八ぢや」といへば。大崎聞き「これ伊八様。お前は此の中藤枝様と口説をなされたけな。幸ひ二階へ遊びに來てぢや。呼んで來て中直しませう」と禿もろとも二階へ上りける。與茂八は二階より下り「伊八様お出なされましたか」「イヤさうでない俺ぢや」「これは民彌様か」「されば太夫が事が心元なさに來たれば。女郎が來て伊八様さうな。藤枝様を呼んで來て中直すというた。どうぞ太夫に會はしてたも」「太夫様は二階へ來てござりますが。七様が來て御座りますれば會はし難い。幸ひの事ぢや。その藤枝様といふ女郎は。去年お前が太夫様にあはう爲。かたにしてお呼びなされし女郎ぢや。チト南風様でござりますれば。やはり藤枝様をお呼びなされ。太夫様へ何でも仰せられましたら。御氣の利いたる道芝様なれば。呑込んでお聞きなされませう」「然らばよい様にそちを頼む。揚錢は無いぞや」「それは私がおめまする」といふ所へ。藤枝二階よりおり「伊八様のござんしたか」と傍へ寄り「これは播磨の鍋二様か」「さればお久しや。今夜は随分と女郎衆を借つて。騒いで氣を慰めてたもれ」與茂八聞き「畏りました。太夫様を借つて参りませう」と二階へ行き道芝を借り伴れ來れば。太夫後より見。はつと思ひ。物

なら伊八様であらう。伊八様なら鼻聲の筈ぢや」といへば。その儘鼻を撮み「伊八ぢや」といへば。大崎聞き「これ伊八様。お前は此の中藤枝様と口説をなされたけな。幸ひ二階へ遊びに來てぢや。呼んで來て中直しませう」と禿もろとも二階へ上りける。與茂八は二階より下り「伊八様お出なされましたか」「イヤさうでない俺ぢや」「これは民彌様か」「されば太夫が事が心元なさに來たれば。女郎が來て伊八様さうな。藤枝様を呼んで來て中直すというた。どうぞ太夫に會はしてたも」「太夫様は二階へ來てござりますが。七様が來て御座りますれば會はし難い。幸ひの事ぢや。その藤枝様といふ女郎は。去年お前が太夫様にあはう爲。かたにしてお呼びなされし女郎ぢや。チト南風様でござりますれば。やはり藤枝様をお呼びなされ。太夫様へ何でも仰せられましたら。御氣の利いたる道芝様なれば。呑込んでお聞きなされませう」「然らばよい様にそちを頼む。揚錢は無いぞや」「それは私がおめまする」といふ所へ。藤枝二階よりおり「伊八様のござんしたか」と傍へ寄り「これは播磨の鍋二様か」「さればお久しや。今夜は随分と女郎衆を借つて。騒いで氣を慰めてたもれ」與茂八聞き「畏りました。太夫様を借つて参りませう」と二階へ行き道芝を借り伴れ來れば。太夫後より見。はつと思ひ。物

は云はれず涙を流し。さあらぬ體にて傍へ行けば「これは太夫様か。お名は何と申します」藤枝聞き「こな様は物覚えの悪い。去年私に逢はしやんした時。お近附にならしやんした道芝様ぢや」まことにさうで御座る」煙管取り煙草のまんとし「これ通らぬ」といへば與茂八聞き「それ煙管通してあげませい」「イヤノ、望みがある。女郎様のお手づから通して貰ひたい。國へ歸りて。藤枝様に煙管通さして。煙草喫うだといへば。痛いはゞになる事ぢや」藤枝聞き「煙管通す事は私が上手ぢや。通して進ませせう。禿の時通して覚えてゐます」と煙管取つて中を渡へる。其の間に道芝と手を締合ひ。心ばかりを通せば。藤枝は煙管通し。かち／＼と灰吹叩けば。はつと肝消し手を放す「サアよう通ります。喫ましやんせ」といふ所へ七左衛門が下男傳六。二階より下り「旦那が淺黄無垢を取つて来いといはるゝ。どこにあるぞ」と民彌を見て「正しくあの人が着てゐるのぢやが」と傍へ寄り「この着物は旦那がの御座りますか」といへば。ム、寒さに借つて着た。それへ持たして遣りませう」傳六聞き「他のものを断りなしに借つたとは。盗人といふもの。これ頭巾もこちのぢや」と引きとり。着物を無理に剥取り。二階へ上りける。民彌は紙子一重のあさましき體となり慄ひる。道芝は氣の毒がり「こ



れ藤枝様。こなた様の逢はしやる客ぢやに心の附かぬ。まづ上着なりとも着せさんせ」藤枝は突
と立ち「奥茂八様これはどうで御座んす。あの様な見苦しい姿な人をわしに合はし。女郎の一分
を棄てさせうといふ事か」と腹を立つれば。奥茂八は返答出兼ね「御尤で御座ります」とうぢ
うぢいうてゐる。民彌は傍へ行き「これ奥茂八。そちが繕ふに依つて悪い。眞直にいうたがよ
い。何を隠さうぞ。私は去年こなたに二度あひました。其の内に。殿の御用が申して来たに。
遅う歸つた故詮議に逢うて。これへ參つてゐたが知れ。親がさんぐ腹立して勘當しました。
それ故立寄らう方もなく。二重でもない紙子單の此の姿になりましたれども。こなたに逢うた
事が身に添うて忘れぬ。何とぞ今一度逢うて。其の上では死んでも本望ぢやと。門々を諷諷
うて。漸う揚錢を溜めましたれども。衣裳拵へることはならず。この體で來く。奥茂八に頼ん
だれば。こなたに逢はしてくれました。此の姿になつたは皆こなた故でござるに。見苦しい程
に逢はぬとは。情を知らぬ女郎や」と誠らしう申せば。藤枝は眞實と思ひ「扱は私故に其の姿
にならしやんしたか。おいとしゃ」と取付き歎けば。奥茂八は「さつても見事の南風様や」と
片頬で笑うて奥へ入る。民彌は道芝が顔を眺め「そなたに一目逢はうばかりにこれ迄來た。生

きる心底でない。この廓の土になる覺悟ぢや」といへば。道芝氣の毒がり「これくゝ死んで花
 咲く事はない。短氣な心を持たしやんすな」といへば「いやくゝどうでも死にまする」「それ
 迄思ひ詰めさつしやつたら。女郎を伴れ奔つたがよい。追手がかゝつたら。そこでこそ女郎と
 心中して死んだがよい」といへば。民彌満足がり手を合せ悦ぶ。藤枝は聞き「太夫様よう云う
 て下さりました。私故に零落れさんしたを何しに見捨てう。伴立つて奔りませう。身拵へをして
 來ませう」とわが事と心得奥へ入れば。民彌は「これはひよんな事ぢや。そちへいふ事を南風
 が奔ろといふ。そちが奔れくゝといふ故ぢや」「こな様の死なうゝと云はしやるさかいで此
 の様になつた。阿房らしい。」と腹を立つる所へ藤枝出で「わしが着換ぢや。これを持つて下さ
 せ」と風呂敷包を民彌が肩へ打掛け「さて能う切れる剃刀を一挺持つて行かう。追手の來た時
 心中して死ぬる爲ぢや」と取りに入る。民彌は「これ何とせう」と憫れる。道芝は「これくゝ
 うつかりとしてゐる所でない。彼女より先へ二人つれだつて奔りませう」「オ、然うがよい」
 と道芝を伴れ出づる所へ。藤枝出で「サア剃刀も取つて來ました。是は道芝様送りて下さるゝ
 か忝いサアござんせ」と民彌を伴れ駈出づれば。道芝藤枝を突退け「これ女郎。俺が見てゐてこ

なた衆を奔らせて。後で詮議の時迷惑する事はならぬ」「これ道芝様。命を捨てゝるれば。こゝ
 なたの様な臆病な女郎ぢやない。サアござんせ」と民彌を引立つれば。道芝は「やらぬ」と引
 きとめる。所へ阿呆長兵衛は風呂敷包負ひ來りつゝ「ナウ殿様。身請の銀持つて參りました」
 といへば。民彌悦び「出來したくゝ。扱はおみつが娘の養子親の所へ才覺に行くというたが。
 それから取つて來たか」「如何にも養子親から參りました」と財布より銀取出し「四貫匁の都
 合ござります。これ御着物大小。質屋より請けて參りました」「ハテそれは言はいでも大事な
 事を」と着物着換へ大小指し「サア身請をする」と與茂八を呼出し「これくゝ四貫匁。諸事
 首尾のよい様に埒明けてくれ」「これはお手柄おめでたい」といへば藤枝は「これ喜んで下さ
 んせわしは身請をします」と悦べば。民彌は「これ與茂八。量見違で氣の毒ぢや」といへ
 ば「其の段は私わたくしが篤と吞込ませう。これ藤枝様。これには段々様子ある事ぢや。申し上げま
 せう」と奥へ伴れて入る。民彌は「ヤイ長兵衛。すぐに太夫を伴れて歸る程に。そちは駕籠を
 借つて來い」「かしこまりました」と駕籠借りに行きにける。所へ與茂八出で「南風様に合點
 させました。扱此の銀は幸ひ二階のお客に。兩替屋がござります。念のため改めて貰ひませう」

と銀を受取り奥へ入る。兩替屋の手代半兵衛走り來り。小四郎を呼出し「お前から銀が要るとおつしやつて下されました故。手代の作兵衛に四貫匁の都合持たしておりましたが。今に戻りませぬ故。御隠居様のお呵りなさるゝ。まづ早々お歸りなされませ」といふ所へ。遣手たま走り來り「禿の小傳が見えぬと云うて。内は煮えます」といへば。小四郎聞き「思ひ當る事がある。二階に七左衛門殿ござる。會うて相談せう」と皆々二階へ行きにける。與茂八立出で民彌に對ひ此の銀二包は封のまゝ。小判を見ました迄でござります。様子ござりますれば。まづお前へ戻します」と差出す。所へ七左衛門小四郎を初め手代下男二階よりばたくと下り。民彌を取りまはし。七左衛門は突と出で「内々承つた。こなたが民彌殿か。私は七左衛門と申す者でござる。ちと此方へ尋ねたい儀がござります。この四貫匁の銀の出所が承りたい」「ム、此の銀は身が家來の者が調へて參つた。その先は存せぬ」七左衛門聞き「此の方より四貫匁銀を取りに遣してござれば。その持つて參つた手代も歸らず。ついて來た禿も見えませぬ。所に此の方の封で。たしかに判まで違ひませぬ」手代半兵衛罷出で「則ち最前拙者が押した判がござります」あの通りでござる。則ちこれは兩替屋で見知りがあると申す。それ故詮議致す事ぢ

や」民彌聞き「ム、扱そなたの家には一年中に四貫匁ならでは銀包まぬか。千貫匁も二千貫匁も。包むであらう。それに封に見知りがあるというて此の方の銀とはいはれまい。身が家來がそなたの店へ行き包んで貰うたも知れぬ。とかく身は存せねば宿へ歸り。家來に様子を訊ね。其方の銀でない。そち達を赦さぬ。與茂八。此の座の者をきつと預けたぞ」と立ち給へば「イヤサ此の封を明けて歸りやれ」「サア歸つて詮議をして來る」「イヤサ此の銀はそちが盗んで來た」「憎い奴の。侍を盗人にするか」道芝は「これ七左衛門様。それはさもしのお前が銀を出し。わしを女房にせうと思召して御座つた所に。銀が遅う來る故。民彌様の方へ參るを。こなたが腹を立て。廊中への僭上におつしやるさうな。その様な事はおつしやれぬがよい」七左衛門腹を立て「賣女奴が憎い事を吐かす」と道芝を取つて投げれば。民彌は七左衛門を投附け「ヤイ道芝は今迄は傾城。銀を出し借金を済ましたからは身が女房。それをなぜ抛つた」「イヤ盗みが知れさうなによつて。人に取つてかゝるか。それくはせ」「心得ました」と立寄るを取つて投げ給へば「ヤレ投げたわ。擲けく」と大勢立ちかかり髪をむしり。着物を引破り。さんぐに打擲すれば。刀を抜き給ふを。大勢かゝり振取り。二階へ向け上り給ふを。大

勢取りかゝれば。取つては投げ取つてはなけ働き給ふ。然る所へ彦六は。民彌迎ひのため廊へ来り「これは七左衛門殿小四郎殿か」「されば有馬ではお心易う語りました。さて狼藉者があつて難儀致す。鎮めて下されますまいか」「それこそ易い事。皆の者退け。身が捕つてやらう」と人を退け。立寄り見れば民彌なれば「これは殿を誰がこの様にした。相手は何奴ぢや一人も通さぬぞ。門を打て。一々首をならべると反を打つて氣色をなす。民彌は「彦六此の形を見てくれ。此の銀は定めて。養子親の方から調へて来たであらう。それを身が盗んで来たといふ。サア銀の出所を云うてくれ」彦六はつと思ひ「イヤ左右の詮議は私が致す。お前はまづお歸りなされませ」「いやさ侍が町人に斯様に踏擲かれ。おめく」と歸りてすむか。この事ばかりは聞かぬ。此の銀を七左衛門が銀ぢやといふ。出所をいへ」彦六赤面し「此の銀は七左衛門殿銀でござれば。何とも申譯はござりませぬ」「ナニ七左衛門が銀なれば申譯がないとは。扱は汝が盗んで来たか」彦六は指俯き「御恩を送りませうと存じまして」といふ。民彌急いで「すれば禿が見えぬといふが禿もそちが殺したな」「お前の御恩を報ぜんと存じまして」と涙を流し申せば「さてく憎い奴かな。今更汝にいふではなけれども聞き居れ。汝は主の娘と不義を

働いて既に討たるゝ所を。某が邸へ駈込み。頼むと申すにより隠匿ひ。あまり詮議が強さに人に見せまいと思ひ。汝を奥の納戸へ隠し置き。つひに親の給仕さへした事もない某が。朝夕の食事を手づから納戸へ膳を持行き喰はしたれば。其の時そちは箸を戴いて。物は喰はずに涙を流し此の御恩を何日の世に報じませうぞ。忘れは致さぬ忝いと云うて。身を拜んだでないか。今かやうのあさましい身になつても。そちを随れて歩くは。盗みをせいでないぞよ。心に見所があれば。まさかの時一方を打破らせ。かなはぬ詮には身が馬の先に立つて討死させ。通れな侍やと人にも讃めさせ。恩を報じさせうと思ひしに。盗みをかはいて。侍たる身が町人に斯やうに打擲に逢ひ。一分を捨てさしたは。扱も結構な恩の送りやうかな。能う恩を報じられたりく畜生め」と面を叩き踏附けく「畜生なれば刀汚しに斬られもせぬ」と太刀ひん抜きさんざんにむね打にして。涙を流し立腹す。民彌の心ぞ無念なり。彦六は涙ながら「お腹の立つは御尤く。お前の道芝を手に入れねば。廊へ行き死ぬるというて御越しなされしと聞き。何卒し私

が一分は捨て、なりとも。御恩を報じたさに。成程禿を殺しまして。あの銀は私が盗んで参りました。あとで女房に承れば。その殺しました禿は。則ち私が娘でござります」と涙ながら

申せば「ナニそちが娘を手にかけてか。しなしたり〜」道芝はこれ聞き。七左衛門が脇差に手をかけ。死なんとするを押止め「こりや太夫何事ぢや」。「イヤ死なして下さんせ。殿へ斯様に恥辱をかけ。禿の小傳を殺させたも。皆私ゆゑでござんす。これが死なずにゐるゝものか」と泣き〜いへば。彦六聞き「これ道芝殿この中でいつち死なないで叶はぬ者は俺でござんすけれど。まだ此の上に如何やうの目に逢ひ。畜生といはれてなりとも。民彌様を御代に出す迄は。死んではならぬ大事の命ぢやと思へばこそ。存らへて物を申せ。こなたが死んでは。身が盗みをした。娘を殺した志が無になります」と涙を零し諫めける。七左衛門は段々の様子を聞き「扱々切なき事ども。至極致した。さて此の上に民彌殿へ無心がある。御聞きなされて下されうか」。「何事でござんす」。「この四貫匁の銀をこなたへ進上致したい。貰うて道芝を伴れお歸りなされて下されよ」彦六聞き「これ七左衛門。民彌様はお侍ぢや。町人に銀を貰はし。殿に禮を云はす事はならぬぞ」といへば。七左衛門は氣の毒がる。與茂八罷出で「七左衛門様。その銀を私へ下されませうまいか」。「そちに遣れば埒があくか」。「まづ下されませ」。「オ、然らばそちへ遣つた。粹のさばきが見たい」。「イヤ別儀もござりませぬ。この貰ひました銀を。太

夫様の借銀へ濟まします。時には道芝様。いづくへお出なされうとも。民彌様と御夫婦におなりなされうとも。お心のまゝぢや」といへば。七左衛門聞き「出来した〜」と悦べば。民彌は「これ彦六。あの様にいへば。太夫を伴れ歸りても。大事ないであるまいか」。「ハテ道芝殿身まゝの上は。何のいひ分がござりませう」といへば。七左衛門をはじめ皆々悦び「めでたいめでたい。大寄して飲み明さう」と皆打ちつれ入り給ふ。戀の花こそ開けたり。

下

開帳の藤山吹

佛は衆生のは、見た

渡守の船頭徳右衛門は。廿歳あまりの女順禮を乗せ「見ればお若い。親御か配遇のおためがな御座りませう」。「イヤ娘に離れました故。子が菩提の爲に順禮します。向ふに大勢念佛を申しますが。何故でござんす」。「されば彼に就いては哀な事がござんす。この十日許り以前の事で御座りました。盗人が十一二な娘の子の死骸をこの所へ擔けて参り。土を掘つて埋めうと致した。所の者が見附けたれば棄て、逃げました。皆集りまして。娘の死骸を土中へ築込め。一七日の念佛を申します」女順禮聞き「その國里は何處の者でござつたぞ」。「古今節それは備後の人なるが。養子の親にだまされて。廓に賣られ玉鉢の。さも荒けなき武夫の。人の寶に目を

かけて。よこせくと打つ刀唯一。打に情なや。「何とやら思ひ當る咄ぢや。その子の親の名は何と申した」フシ「今は歎きて返らねど。語るもいふも哀やな。いたはしや幼いの。國里はいづく。いかなる所ぞや。父は三宅の何某名は。彦六と申すなり。吾が子と知らでおとましや。殺して跡の悔みごと。母は狂女の如くにて。苦しけなりし聲音をし。吾が子返しやれこちの人。涙にくれて同音に。手に水晶の數珠持つて。なまいだく。なまみだく南無あみだく」と涙乍ら語れば「喃それは私が娘でござる」と泣沈み給ふ「最早歎かせ給ひても返らぬ。跡を弔うてやらしやりませ」といふ所へ。悪人縫之丞大藏。侍引具し來り「船を出せ」とわめく。所へ百姓と見え。蓑笠を被。傍へ寄り大藏へ斬附け「新太郎を見忘れたか」といへば「心得たり」と切結ぶ。大藏が侍船頭を捕へんとするを。新太郎兩手を切落し。追つかけ行く。大藏來れば船頭は。切落せし兩手を懐へ入れ「御赦されませ」と其の手にて拜むを。誠の手と心得。ひんねぢ。船頭が帶解き搦め附け。おみつを討たんと太刀抜くを。徳右衛門裸體でそつと脱出で。小股を取り打伏し斬伏せる。所へ縫之丞驅來れば。又元の如く着物へ手を差し入りゐる。又縫之丞おみつを討たんとするを。裸體で出で。又背後より寄るを。振返り見つけ「これはし

たり。斬落した手を縛らし脱出でをつたか」といふ所を。新太郎馳來り。後より縫之丞を切伏せ「サア悪人どもは討取つた。民彌様彦六殿には。此の度都壬生の開帳へ御参りなされた。いざあれへ参らん」と皆打連れ参らるゝ。かくて都壬生の地藏菩薩開帳あれば。皆々参詣有り。堂にて御對面ある所に。内陣より禿の小傳走り出づれば。人々「これは。其方は死したが迷うて出たか」小傳聞き「わしは殺さるゝと思ひましたが。御出家がござつて。この厨子を下され。この所へつれて御座りました」といへば。民彌押披き見給へば。家の御寶一寸八分の地藏菩薩。御胸より血流れ出づる「扱は此の子が身代りに立ち給ふか」と皆々伏拜み悦び給ふ。さて開帳の法會さまぐ。極樂の體を學び給ふ。佛法繁昌ありがたしありがたし。

主馬判官盛久

(十行三十一丁本・十行三十五丁本参照)

臨クセ長門の國へも敵向ふと聞きしかば。又船に取り乗りて何處ともなく、フシ押出す。地かゝる折ふし味方とも敵かともいさ白妙の。卯の花絨に月毛の駒海へさつと打入れしが。一門皆々船に浮めば乗り後れじと汀に打寄せれば。御座船も兵船も遙にのび給ふ引。地平家方には是を見て正しく源氏の若者ども。功名せんとて寄せつらん射取れや／＼と轟きける。詞彼の武者聲を揚げ全く源氏に候はず。何某は平家の侍主馬判官盛久と高らかにこそ呼ばはつたれ。能登守教經船ばりにつつ立ち上り如何に盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。其の外亂舞堪能の譽ある故。屋島一の谷にて侍大將うけたる身が。此の期に臨んで引返したる臆病さよ。如何に如何にと仰せける盛久駒を控へ。仰はさる事なれども某此の度。薩摩守忠度卿の御手に屬し候。忠度卿と某は和歌の同學心を同じうするを朋といひ。志を同じうするを友といふ。彼此つきせ

ぬ御好に。地忠度卿はあへなくも。岡部の六彌太に討たれさせ給ひぬ。今は何をか期すべきと存じ切つては候へども。御一門の御行方覺束なみの船の内。如何と存じ一つは又。一年小松殿北山にて。茸狩の遊路の御酒宴の時。主馬の盛久一曲奏で御褒美として。床夜といへる女房を婦妻に下し賜ひ給ひ。夫婦の袂を重ねては候へども。地未だ取り迎へもせざる中此の兵亂起りたり。未來の固め結び度く是迄参り候と。地勇める眼に涙を浮べ。スエテしみ／＼とぞ語りける。地一門の上下感じ給ひ。優しき侍の心底床夜の前に引合せ。最期の名残惜しませよと料の御船。御供船。残りなく尋ねれども床夜の前はなかりけり。詞盛久聞きも敢す何我が妻はなかりしとや。彼が所存を察するに御運盡きし平家の我々。未頼みなきと思ひ夫を捨てて落ちたるよな。地己れ女め畜生め。左様の心と知らずして。敵に後を見せ是迄來りし悔しさよ。妹背の契はさはなきもの四相を悟る盛久が。眼力違ひし無念さよとスエテ不覺の。涙を流せしが。地ヲ是もよしなし。今は浮世に心留まらずお暇申して我が君達。源氏の大將義經と引つ組んで死なずんば。再び又人に面を向くる事あらじ。是迄なりと夕沙の引きは返さじ武夫の。八十島かけて海原島がく。れつつ三重別れける。地主馬判官盛久は今にははや心安う討死

し。忠度卿と手を取つて死出の山路を伴はんと。夜を日について打つ程に、フシ須磨の上野に着きにけり。地岩の上に駒かけする四方をきつと見る所に。いづくよりかは流矢の。馬の平頭羽ぶくらこめてはつしと立つ。馬は頻りに跳ね上り屏風倒しにかつばと落ち、(異本、倒るれば。我が身は)岩角に胸打當てうんとばかりに息絶ゆる。地時に誰とは知られねども。水を含んで口より口に吹き入るれば。ステやうく、氣つき息をつぎ。地テ、有難しと眼を開けば、こは如何に。花と驚く小娘の雪より白き手づからや。爪の紅葉もしむばかり。フシ額を抑へて看病す。地盛久一目見るよりも。はやぞつとしてくらくとステ又目を。まはすばかりなり。地エ、南無三寶野干の障碍と觀念し。何方かは存せねども。御恵にて命を拾ひ有難し。地重ねて御禮申さんと云ひ捨てて走り行く。女鎧にしかと縋り。是は御器量には似合はず。忽ち御一命終る所を助けたれば、妾はこれ命の親。貴様は我が命の子。地子故の闇に迷ひしぞ、フシなう孝行あれとぞ仰せける。地盛久重ねて扱ももたれし女かな助けられて迷惑なり。地軍半の事なれば是非こゝを放してたべ。エ、さ程に思召すならば。最前妾が參らせし水を返させ給へとある。盛久可笑く思召し。扱々無理なる人に出逢うたり。地いで水返し申さんと唾ばきして行かんと

す。詞どこへくさな上手をなし給ひそ。以前は自ら口より口へ參らせたり。地とても返させ給ふならば。此のお口からと言ひけして。顔に火を焚くはもじさや。フシ袖をひねりて申さる。地流石の盛久返答なく。詞いかさま是は仔細あらん心底残さず語られよとありければ。地彼の女嬉しげに今は何をか包み申さん。聞きも及び給ふべし薩摩守忠度様へ一命を參らせし。地三日月が小姑、曙と申す蚕の子なり。三日月に別れてより憂き身の便候はず。死なんと思ひつめたれども。夫を持たで死しぬれば。フシ賽の河原もうらめしく。地誰をがなと思ふ内お侍と見受けたり。言葉でなりとも二世迄の殿よ妻よの御契約。侍ならばお情にとステ涙を。流し語りけり。地あだなや餘所に盛久も色に染みたる風情にて。詞我はこれ主馬判官盛久なり。忠度卿の所縁といひ殊更今の志。地外ならずは存すれども斯く成り果てし平家の運。フシ今日の命も知らぬ身が。夫婦の約束無益の事只思ひ切り給へ。曙涙を抑へ君が一夜の情には。妾が百歳何かせん只今なりとも諸共に。死なば一所ぞなうその手間に。片時も早くおうといふ事ならぬかとステしと、叩いて、フシ寄添へば。地岩木にあらぬ盛久我をほつきと折り。詞つれて死なんとあるからは何しに詞を背くべき。未來迄も夫婦ぞや。さりながら軍中に女連れんも見苦しし。

地手を負ひたる此の馬を預け申さん牽いて庵に歸り給へ生きるとも死ぬるとも此の言葉は違へまじ。是についても我が妻の床夜の前は畜生に劣りたり。生中郡を出づる時討つて棄てんすものを。エ、言ふもよしなしあれ見よ敵もはた近し。駈入つて軍せん後程庵へ案内し。構へて一所ぞ夫婦ぞとオクリ別れて。濱邊にさがりしが、フシ人丸塚の。地彼方より腹巻に烏帽子道服打ちかけたる。武者こそ一騎續いたれ。間近く寄せて討取らんと一木の松に木隠れて。暫し窺ひよく見れば。我が妻の床夜の前。詞エ、憎しきたなし夫を振捨て。都へ歸る道すがら武者に似せて行くならん。地己れ驅け出で一討にせんか。わざくれ敵に討たせんか。とやせんか。くやとスエテ牙をかみて立つたる所に。詞源氏の兵。見玉黨の中よりも。洲濱の十郎と名乗りて出で。内裏上臈と見奉る戰場踏みも習はせ給ふまじ。何處迄も御供と隙をあらせず打つてかかる。地是こそ望む所よと長刀投げ捨て打物ひらめかいて。面も振らず飛びちがひ此處を先途と戦ひしが。詞弓手下りに打つ太刀を押しもちりに受け流し。十郎が鎧の上帯高紐かけて嵐に脆き風車。車切といふ物にはらりすんど切落し。地袖の振にて太刀押拭ひ。フシにつこと笑ひて。立ち給ふ。地盛久御覽じ少しは思ひ直せども。今暫くと見る内に。詞小山の太郎武者宗

重と名乗つて。六尺ゆたかの大男錦革の胸丸黄金作の太刀を佩き。若黨二人左右に立てしんづしんづと出で来り。天晴御働きや。候。平家に於て誰人のよね様ぞ名乗つて勝負し給へと高らかに呼ばはりける。ヲ、自らは主馬判官盛久が妻。建禮門院の床夜の前。地盛久殿とは一の谷にて別れしが。定めて討死し給ひなん。夫を取られし鴛鴦の惜しからぬ命ぞや。以前討ちたる十郎が首を冥途の土産に。盛久殿に逢ひ度きぞ寄つて討取れ餘さじと。長刀取伸べ参るといふ。聲の内より太郎武者烏。踊の早速を踏み。詞太刀捻ぢ落し兩足かいて大地にどうど踏み伏せ。詞太刀を首に押當つればエ、無念やとばかりなり。地盛久も堪られず。如何はせんと心を碎くは。フシ危かりける次第なり。詞太郎武者笑顔してこれお上臈。討死したる盛久に心中立して死なんより。我が女房になり給へ命を助け参らせん。申しても某は武藏の國の旗頭。一國の者どもに奥様と仰がれば。一生の楽しみぞさあ。お返事はどうぞと。地鎧の脇より手をさし入れこりやならぬ。命取りめと戯るゝは。フシむくつけにも亦いやらしし。地床夜の前聞き給ひ仰は嬉しう候へども。敵と味方の濡衣うらありけなる御言葉は。誠ならじとありければ。詞弓矢八幡日本の神侍冥加。微塵程も偽りなし。ム、其の御誓文の上からは。何が扱鬼も角も御心任

せとある。地ヲ、忝しと引起し。鎧に付いたる塵打拂ひ。さあいざさせ給へと御手を取れば振放し。長刀おつとり飛びしさりこれ侍畜生め。戰場にて斯様の振舞ある事か。貞女兩夫に見えず戦の習ひ力なく。組打せしもけがらはしむざくと死なん無念さに。誑りしを誠と思ふか口惜しや。地平家の御代が御代にして夫諸共にあるならば。今の無念はよも聞かじと怒れる眼に涙をそゞぎ。長刀かざしかゝり給へば宗重大きに怪轉しあれ踏み殺せと弓手馬手よりどつとかかる盛久今は堪られず飛んで出で宗重が胸板はたと蹴倒し。二人の若黨兩手におつ取り微塵になれとかつばと投げ。地古木立に立つたるは、フシ心地よくこそ見えにけれ。地此の勢に恐れをなし盛久許せ。開口で言うたばかりぞ女房には手もさゝず。許せくと云ひ捨て跡をも見ずして逃けて行く。半町ばかり追つかけしが立歸りて縋り付き。地あつばれ女よ我が妻よ。最前より事の様を見届けしに。妹背の貞節淺からぬ志の嬉しさよ。斯くとは知らで恨みつる悔しさ。心底懺悔し給へば姪うらめしけに涙ぐみ。我は又そは知らずはや討死なされつらん。一所に死なんと参りしに。とくより名乗り給はずして。エイ惡謔な小面憎やと。涙まじりの笑ひ顔。フシさゝめくちせぬ縁とかや。地さあ此の上は夫婦諸共御一門におつ付き。一所に死な

んと勸むれば。ヲ、尤と盛久も二足三足出で給ふが。南無三寶 曙に堅き契約如何せん。行かねば叶はず捨てても行かれず。思案とりく千鳥足跡にも心は残れども。妻に誘はれ力なく又引き。かへし 三重 落ち給ふ フシいで其の頃は。地元暦二年三月廿四日。平家の兵船三百餘艘皆陸にぞ下り立つたる。地源氏の大将義經采おつ取つて。雑兵に目なかけそ一門の人々を打取れ生捕れ組み留めよと。地八方に下知をなし白旗赤旗立違へ。山を動かし火燄を降らし此處を先途と 三重 戦ひける フシ爰に又。地源氏の 兵 堀の彌太郎近經は。させる功名もきはめず好き敵來れと待つ所に。地床夜の前は船を目がけて急がる。彌太郎すかさず飛びかゝりむんずと組んで取つて抑へ。首を取らんとしたりしが鬼畜にあらぬ彌太郎。いたはしと思ひけんこれく上藤。君は正しう女院の御近習と見受けた。敵を助くる法はなけれど申しても女性の事。地あれこそ平家の御座船よ。とうく追つ付き給へとて フシ助けてこそは通しけれ 地小山の太郎武者宗重は彌太郎に意趣ある中。此の體を遙かに見て見たぞく。堀の彌太郎近經は敵を助けし二心。大将に訴へんと言ひ捨ててかけ出す。南無三寶色に耽ると讒せられば。如何言譯立つべからず討死して某が。地惡名の面を脱ぐべきと平家の勢の真中に。餘所目もふらず切

つて出る。主馬判官盛久是にありと渡し合ひ暫し支へて戦ひしが。盛久何とか思ひけん太刀をからりと投捨て。さあ彌太郎首を取れとどうど座を組み居たりけり。彌太郎呆れてこは如何に。なに首差伸べて打取れとは。とても此の近經に敵ふまじと思ふか。如何に〜と言ひければ盛久涙を浮べ。ヲ、御邊等五人や十人は物の數とは思はねども。情の道に矢も立たず。地以前御邊が助けしは某が女房ぞや。それ故になき名を取り討死せんと志。あつたらしき侍を殺さんも本意なし。平家は斯く迄運盡きて我々とても残らぬ身。急ぎ首取り御分が仇名を清めてくれよ。ヲシはやとく〜とぞ申しける。地尤といひあはれといひ。彌太郎も感涙にしばし。返事はなかりけり。詞つれなし彌太郎志を無になすかと怒れば。ヲ、理々。然らば宗重めと對決の證據生捕にすべし。何と繩をかゝつてくれまいかと言へば。はてともかくもと後手になりけるを。地ヲ、嬉ししく〜戦場の習ひ必ず〜恨むるなど。上帯解いて高手小手に縛め。弓矢取り身の是非なさと。二人目と目を見合せて涙をスエテはら〜とぞ流しける。地かゝる所に沖の方より聲を立て。平家の大将宗盛公を生捕り。一門残らず討死と呼ばはる聲を聞きしより。地源氏の大勢一同に。関をつくり籠を叩き喚き叫んでどつとかゝる。同大将義經悦喜あり。同志軍

すな船反すな。地ッ勝つて兜の緒をしめよ降人討たすな首散すなど。駒の手綱をがいくつてしんづ。〜しづ〜と乗り戻し乗り返し。諸軍勢に下知をなし數多の生捕引つ立て。〜上下千秋萬歳の勝関。をこそ揚げにけれ。

第二

昔在靈山の御名は法華一佛我等が爲の觀世音三世の利益同じくば。刑戮に近き盛久が。末暗からじと思へども月の影見ぬ牢輿の。打萎れたる讀誦の聲。スエテ憂き時連る、友もがな。土屋の三郎輿の戸を叩いて如何に盛久殿。土屋が参りて候誠に人多き中に。某預り申す事他生の縁と存候。扱堀の彌太郎申し越し候は。鎌倉迄は遠路の旅御心も悩むべし。牢輿を許し馬に乗せ参らせ。よく〜いたはり得させよとくれ〜頼み候ひき。地と〜御出で候へと輿の戸開けば盛久は。スエテやう〜に立出でて。土屋殿の御芳志申すもなか〜愚なり。平家の生捕多き中に。盛久はなんほう果報の者。地仁義正しき彌太郎殿に生捕られ。情ある土屋殿に預けられ申す事。弓矢の運に叶ひたり。就いては道中馬にて下し風景をも見せ給はんとや。今生の思ひ出かへす〜も有難しと。互に惡意の挨拶にて。オッ奥の〜一間に。ヲシ作ひける。

地かくて土屋の家の子櫻井小二郎承り。良い馬牽かせて参るべしと厩。厩を 三重へふれければ

あけぼの馬子唄

フシ 聞き傳へつゝ。馬子ども。腰に馬柄杓手にや又轡。難波入江の。蘆毛の駒や 小オクリ月毛。雲雀毛甲斐の黒駒。額白。フシ三つ白四つ白月額。地圓額なる童ども。さも清やかに出立して。馬やろくなく。お馬やらんとフシののめきける。地櫻井小二郎立出でて。調平家の捕虜盛久を駕し参らす御傳馬。馬上の御眠りさまし。名所物語仕つて御供申せとありければ。地馬子ども承りむつかしの仰候や。スエテ驛路に馴れし賤の業。星を載く明け暮に。名所古跡はそも知らず。フシさり乍ら。數多の人に幾人か。馴れて別れは日に千度。國々所々の風俗は。フシをかしさつらさ。折々に。品こそかはれ。此のはなよ。此處は名に負ふ難波津の。梅を手折りて駒の鞭。歌さても見事な。おつゝら馬や。色と情を。フシなひませの手綱。たぐりて馬追ひかけて。花の下道行く時は。さながら是も櫻蔭。春を我が身に白露のたま。休む折柄はフシ朝な夕なに。秣かり。桔梗龍膽片敷きて。秋の野に伏す時もあり。昨日は東の浮名を乗せ今日は。

筑紫の戀をやる。唐も大和も荷に負うせ。フシ袖打拂ふ蔭もなき。雪のゆふべの乗りかけや。栗毛馬追うて黄昏急ぐ。忍ぶ竹笠わけ有りて。草鞋の紐も下紐も。解けて一夜は轉びく。フシころび寝に。下る迄との其のきぬぐに。形見残して菅笠や。菅も涙の。雨降れば。蕨のもすそもつい。くくつくりしよんほりと。案山子に似たるなりふりは。何故物をア、思ふぞと。心にくくも。フシ可愛らし。ハルフシ憂きが中にも。思出は。せめて野がひよ傳へ聞く。車匿童子も御佛の。誓の馬に法の道。荒野の牧の駒だにも。取れば取られて懐くてふ。馴れし家路の道しるべ情の重荷。身に餘る。フシ其のかこち草。いたづらに憎か打たりよか一鞭も。隙行く駒の際をなみ。東にかけり西に行く。ヨドリ歌小松つるく坂越えてえ。伊勢参宮は通し馬。唄の一節しめやかに主馬の尾髪に置く霜の。高嘶きに寝ざめして。ハツミ假寝を出づる。フシ曉は。枕も夢も移り香も。じつと其の儘身にしめて。馬上も二人寝た心。旅は妬ましわりなしや。住まばとづ國水清し我は。御牧の。放れ駒よさん。くあ繋ぎとまらん主あらば代々の縁に。引留めく。しやんと繋いで馬ぢやもの。君が爲にと暮し来て。月の都の二千里に。驅り入りつつ薬取る。長地不老不死の龍の駒今此の馬に準へて目出度き御供申さんと。手綱かいくり語り

しは。フシけに面白くぞ聞えける。地櫻井大きに感じ。扱々やさしき者どもかな。調さり乍ら中に牽いたる連錢草毛は手負ひ馬。駿足危し罷り歸れ。残りて二匹留れとこそは申しけれ。彼の童聞きもあへず何なう妾が馬は召さるまじとや。それは誠か悲しやな四國九國の戰場も。勤めし名馬叶はずば叶はぬ迄よ。盛久様に一目逢はせて給はれとスエテどうど。伏してぞ泣き居たる。詞やら不思議や心得ぬ言ひ分何者ぞと咎めければ。地ヲ、御不審は尤なり。自らは須磨の蜚曙と申して。盛久様には故ある中是も召されし御馬なり。あまりゆかしさ遣る方なくせめてはお供と心ざし。かくはしつらひ参りしなり。あはれと思ひ只一言。言葉をかはさせたび給へとスエテ又さめ。ぐとぞ泣きにける。詞櫻井も計り難く。奥に立入り主君に斯くといひければ。土屋暫く思案し。不便には思へども。盛久の所縁となれば。女ながらも平家の餘黨遁れ難し。且は彼が身のため土屋の三郎が。情なき分にして疾うく返せ。地承ると表に出で。詞大事の囚人對面は叶ふまじ。地追出せとの仰なりそれくとて中間ども。あらけなく引つ立て門外に押出す。曙わつと聲を上げ今迄はさりととも頼みしかひも仇となる。妾こそ馴染まぬ中。畜生ながら此の馬の。主従の縁なさと鞍に縋つて口説きける。フシけにこと。わりと聞えける。

地馬も性ある物なれば。三度嘶き尾を伏せて。フシ黄なる涙を流しけり。地かゝる所へ床夜の前いと忍びたる風情にて。土屋の門に佇み櫻井に近付き。詞自らは盛久が婦妻床夜と申す女。別れてよりは便もなし。地あはれお慈悲に一目逢ひ度う候と。スエテ思ひ込うでぞ語りける。詞櫻井憐に思へども態と聲を荒らけ。最前もあれなる女。盛久の妻と名乗つて來りしに二人あるべきやうなし。地痴れたる女め思も寄らずと散々に追出し。門の扉をはたと打ち。フシ涙を流し入りにける。地何それなる女盛久の妻と名乗つて來りしとや。詞其方はいづく如何なる人にて。盛久殿とはどうした中ぞと宣へば曙聞いて。いやいな事を調ぶる人かな。我は須磨の曙とて盛久様とは女夫も女夫御女夫と言葉を放つて申しける。床夜の前は大きにせき。扱言ひ悪き事をよういふ人かな。喃そこな人。男の習女一人をまぶらうか。戯いふまい物でもなし。地夫をはや夫婦とや思も寄らず。我こそは床夜の前盛久様とは。女夫も女夫御夫婦と色を違へて在しける。詞曙重て。自らは忝くも盛久様の御命を救うたり。聞けば御身は堀の彌太郎に助けられ。其の代に盛久様を生捕つたりと承る。地夫の敵彌太郎をなど當座には討たざるぞ。詞是で女子の一分立たうか。今でも御身人間ならば彌太郎を討つて見よと。地たゝみかくればせきかくる。心の瀧に淀鯉の

登りつめつ、床夜の前。詞エ、あの口わいの。これ人の事は言ひよいもの夫の敵と思ふならば。其方はなど彌太郎を狙うては討たざるぞ。ヲ、それをそちに習はうか如何にも討つて見せん。床夜愈腹を立て。我が夫の敵を人手にかけうか妾討つて見せうぞ。地夫の敵を討つからしめては盛久殿は我等が殿よと。發言放つて申さる、曙も氣をあけ。詞ヲ、其の方も討たば討て地自らは三日の内に討つべきぞ。妾も負けじ今宵の内に。彌太郎が首取つて己れが面に打付けん。ヲ、其の口たばへ御身が討つか。我討つか討つてからの廣言ときつと争ふ目の内に。色と妬みを含ませて睨んで左右へぞ。三重、別れける。ヲ、既に其の日も。くれなるの恨み少き彌太郎を。女の意地の詮方なく守刀を肌指し。今宵討たんと忍び入る。オクリやたけ、心ぞ哀なる。ヲ、折節彌太郎。地土屋が陣屋へ行きけるが歸るさの門外に物こそ見ゆれ提燈あけよと地いふ聲に。驚き逃げんとし給へど案内は知らず道はなし。憎々としておはします。彌太郎立寄りこれはく。壇の浦にて助け申せし盛久の簾中かや。地さこそ流浪し給ふらん。先づ此方へと請じ入れ。ヲ、わりなく欺待し給ひける。地其の後彌太郎申しけるは。武士の習ひ是非なく生捕り参らせ候へども。御いたはしう存じよくくいたはり申せとて。土屋が方へも毎日人

を遣し。只今も御見舞申したり。地おのくを見るにつけ。よしなき哀を見聞く事よとスエテ涙を流し語りける。地深き情に床夜の前。なほしもいふべき恨もなく。詞淺からぬ御志を承り。御禮申さん其の爲にかくは忍びて参りしと誠しやかに言ひ直し。地なう今宵も更け候平家は滅び夫には離れ。住むべき宿も候はず一夜を明かさせたとある。彌太郎呆れてム、易き程の事なれども。陣屋の體にて間所も候はず。女中のお宿は何ともと當惑したる氣色なり。御道理さりながら御身も我も曇らぬ身。誰が何と申すべき。御芳志に只一夜と返すく宣へば。然らば我等も郎黨もあれなる小屋に臥し申す。此處にて明かさせ参らせん。扱もく翠帳紅閨に起き臥し給ふ御身にて。いぶせき陣屋の假枕いたはしさよあはれさよ。我鎌倉へ下りなば盛久殿の一命は何とぞ申し有むべし若し御訴訟叶はずば。下人の手にはかけ申さじ。御腹召させ申すべし如何なる者が敵となり如何なる者が味方となり。心の外の仇を結び今のあはれを見る事よと。他事なくもてなし入りけるは情深うぞ。三重、見えにける。ヲ、未だ寢もやらぬ地床夜の前彌太郎が豫ての情。今宵の言葉を聞くからに何とて是が討たれうぞ。仇を思にて報すれど恩ある人に仇はなし。道を忘れて討つたらば。佛にも捨てられ夫にも討の。ヲ、當るべし。細心あれ

ば魚心ありと世話にいふも是ならん。ア、討つまじく勿體なや是ぞ嘆志の劔の山と。守りの刀をからりと捨て、フシ涙に。くれておはせしが。南無三寶忘れたり今宵もはや彼は誰時。今にも曙來りなばつがひし言葉は何とせん。先を越されて一分立たず討たねば叶はず討たれはせず。討てば仁義の道立たず討たねば女の意地立たず。道を立てうか意地を立てうか。とやせんかくやと途方にくれスエテ詮方涙に咽ばる。地エ、思ひ切つたりと彌太郎が立て置きし籠の硯取出しこまぐと書き置いて。黒髪押切りかき亂し。あたりの烏帽子直垂を枕の上に取りかけて。男の寢姿しどもなく。南無阿彌陀佛の。口に吹き消す燈火とオクリ共に。かぎりの命かなフシはや鐘鳴りて。地曙やかくとは露もしら装束太刀脇挟み彌太郎が陣屋の體を來て見れば。門戸厳しく入るべきやうも無き所に。一木の松の枝垂れし此よ屈竟と左手を伸べ。地下枝に縋りてかろくと。彼方へひらりと飛んだるはオクリ胡蝶の羽ぶく如くなり。内より門そつとあくる。此の音に床夜の前すは曙ぞと靜まりて。今ぞ最期と觀念すスエテ心の内こそあはれなれ。曙はさし足し寢間に入り。枕を探つて打領き。地是ぞ彌太郎の敵と首かき切り。フシ提げ飛んで出でにけり。彌太郎一家目を覺まし。地盗人あんなれ遁すなど。松明提燈星の如く曙を

取りまはす。近經怒つて。女の身として此の彌太郎が陣屋へ狼藉する條いはれなしと。はつたと睨んで申しける。地彌太郎といふ聲に曙驚き。火影にすかせば女の首。ハア仕損せしと投げ捨ててスエテ呆れ。果ててぞ立ち居たる。彌太郎も肝を消し。よく見れば床夜の首。是はいよく合點行かず仔細を申せと詰めかくる。ア、暫く。地我は須磨の曙と申す者。盛久殿とは一言の契り故。嫉妬の恨みを言ひ寡り御身を討たんと争ひ。此の仕合に候と今日の次第を詳しく語り。冥加につきしか狼狽しか。仕損せし面目なさとスエテ聲も。慄ひて語りける。地彌太郎横手をはたと打ち。詞扱こそ宿とは言ひつらめ侍勝りの者どもと。地しばし感ずる其の内に郎黨どもあたりを捜し。是に遺書候と彌太郎に參らす。彌太郎披いて讀上ぐる。筆のたてども跡先にスエテあはれを盡せる文章ぞや。中昔忘れぬは世の情うとまれぬは妹背の中。地鹿の角の争ひに今宵限りの小夜砧。討てば情の恩を知らず。討たでは夫婦のフシ義理立たず。地恩にも戀はかへられず戀にも恩は捨てられず。詞二つの道が心を責め露の命を捨て筆に。言ひ残したる我が心あはれと思ひ恨みを晴れ。亡き跡とひてたばせとよ。地思ひ切りにし一命は塵程も惜しからず。さり乍ら我が夫に逢ふ事こそは叶はずとも。同じ浮世に存らへば暫し樂し

む方もあり。死なば一所と契りしに一人先立つ三途の河たが手を取つて渡るべき。返すくも名残惜しや南無阿彌陀佛と讀みも終らず彌太郎涙に咽びければ。曙其の外心なき田夫野人の郎黨ども。一度にわつと聲を立て、フシ袖も。朽ちねと泣き居たり。地稍あつて曙涙を抑へ。扱も扱もいとほしや女は我人相身互と知り乍ら。よしなしぐさの争ひは今更悔むかひぞなき。今日逢ひそめて今日の内に討つ討たる、悪縁は。さぞ過去の敵ならんさりとは許してたべと。敢なき首に抱き付き我も追つ付け死出の山にて。直に逢うて言譯せん。なう人々自らを斬てなりとも突いてなりとも殺してたべ。今生後生の御慈悲と、フシ五體を。投けて歎きしが。地工、益なし是迄と。刀おつ取り既に自害と見えし時。彌太郎縋り押し止め。ヲ、フシ思ひ切つたる心底や。地さりながら御身死んでは死したる者いよく、罪業重かるべし。盛久浮世にまします内は此の彌太郎が死なせはせじ。亡き人の爲ならば水花取りて結縁あれと。諫むる涙はらくはらはらどりの聲添へて夜はしらぐと曙も。生きての歎き死しての思ひ。思ひやられて聞く人皆袂の。海とぞなりにける。

第三

良薬口に苦く忠言耳に逆ふ先言あり。頼朝義経御中不快の儀によつて。腰越より追つ返され捕虜ばかりぞ引かれける。小山の宗重惶しく參上し。堀の彌太郎近經こそ平家の餘黨に與し。我が君へ野心の企候其の仔細は。平家の兵盛久と組みは組んで候へども。敵味方談合づくにて生捕り。後日に源氏を傾けん所存紛れなく候これ一つ。殊に盛久を判官殿の指圖にて。土屋の三郎預り下り候へども。堀と土屋と心を合せ盛久に繩をもかけず。牢輿にも入れず遊山花見の如く傳馬に乗せ。こゝかしこに二三日づ、逗留し遊びがてらに召連れ候。剩へ彌太郎は都に残り。平家方の落人を集むる由かれこれ逆心疑ひなく。鎌倉へ入れては大事と存じ。某金洗濯に待ちうけ盛久を受取り。土屋をば追つ返して候と。つまぐ合せて偽りし、辯舌こそは恐しけれ。頼朝聞召し。堀土屋に限り逆心とは思はねども。臍を固うするは名將の道。地先づ盛久を召出し。相尋ぬべしとの仰にてオクッ御白洲にぞ、フシ引かれける。頼朝御覽じ盛久とはお事よな。召出す事餘の儀ならず。堀土屋心を合せて頼朝を。傾けんと巧む由汝こそ知つづらめ。眞直に申せと大様にこそ仰せけれ。盛久聞きもあへずこはあたらしき御説や候。某は平家の侍兩人は御家來。逆心ありとて我等に知らせ申さんか。大將は眼士卒は手足に譬へたり。

君の手足に痛みあるを盛久が存ぜんや。御心に問ひ給へと。フシ空嘯いてぞ居たりける。頼朝問召し。然らば兩人何とて汝にかく情をかけるぞ。盛久居丈高になりから〜と笑ひ。扱も源氏の大將の言はれたり〜。情ありとて謀叛人といふべきか。堀も土屋も文武の侍頼朝には過ぎたる者。逆心あるは大將の誤。平家方の某に味方の恥を問ひ給ふ。源氏の大將頼朝は聞きしに劣る愚將かな。地斯程の人に破られし平家の運こそ拙つたけれと。牙を噛み身を慄はし。鏡のまなこなる眼より涙をスエテはら〜とぞ零しける。君御立腹まし〜。扱は彼奴めが同心に紛れなし。白狀せずば拷問せんとぞ仰せける。盛久些とも臆せず。はて拷問は心次第。つがひ〜の筋を抜き骨を碎き煮らるゝとも。源氏の事は知り申さぬと顔打振つてぞ居たりける。頼朝重ねていや〜是は假初ならず。土屋が所領を召上げ出仕をとめよ。宗重は上洛し彌太郎を連れ下れ。地扱盛久は川越の重房に預け置く追つて詮議を加ふべしと御座を立たんとし給へば盛久つ立ち上り。詞エ、目のあかぬ大將笑止千萬。正しう夫なる宗重が讒言よな。やいさ卑怯者。汝某が妻に戯語吐いて追つ立てられ。高這ひして逃けたるが。咽元のどもと過ぐれば暑さをば忘れたか。地エ、汝蹴殺おのれけころしてくれんと繩取宙ちゆうに引つ立て。かけ出で〜引かれ行く所存の程こそ。三重

無念なれ。フシ大方の。地罪ならなくに科とがもなき。人を害せし我が身ぞと。スエテ我が心さへ恐ろしく如何なる僧をも師と頼み。黒髪剃りて袖に染め。浮世の隙ひまをあけほのは。寺ある方へと北山や大原の麓に。フシ着き給ふ。地是より奥には人の住むべき體もなく。雲行客の跡を埋む。初山はつやま櫻二房ふさ三房ふさフシちり〜。水の谷川や。誰が摘み捨ての。穢けがしをれて地行く水に。女の足駄流れ来る。扱は住む人あるにこそとオクリ流を傳つたひ分け入れば。一字の庵室物寂しやくびて花を主といはつし。庭に茂れる山吹垣。地寛の澤に鳴く蛙。心細くも住みなせり。地障子を開くれど主もなく。中尊ちゆうそんは觀世音五色の糸を御手にかけ。八軸はつしやくの妙文九帖めうもんくの御書。燻くもる焼香しん〜と。スエテ茶を煎にる釜竹かまたけの竿。鹿の子の手巾しゆきんかけすてし。淨名居士じやうみやうしの方丈に。三萬二千の床を並べ諸佛を請まねじ給ひしも。フシ斯くやと殊勝しゆしょうに羨し。地奥の一間は閨ひまらしく。玉章たましょう繼つぎぎて紙帳しじやうとし。涙に朽くちし文枕ふみまくら。物思ふ身はかくこそとオクリ住む人〜こころ奥のかし。フシかゝる折節せつせつ。地二八ばかりの二人ふたりづれ浮世も髪も切り捨てて花筐はなかご肘ひじにかけ爪木つまさきに蕨折わらびりなれぬ。篋かかき分わくる岨道そほみちや。なに踏ふみたててあ痛しと。笑ふこころ〜ほの近く。フシ庵いはりにこそは歸りけれ。地曙を見るよりも珍めづしや都人みやこびと。道に迷まよひ給ふかや何方どこなたよりとありければ。ア、御免ごめんなりませい。自ら

は出家の望候へば御弟子になして給はれとある。ム、おいとしや年にも足らで。何故の思ひ立ち何方の人やらん。自らは須磨の曙と。地言ひもあへぬに二人は手を打ちなに聞き及びし曙とや。扱は三日月の小姑か。我は忠度が妻菊の前が成れの果。鎌倉の沙汰として六彌太が婦妻にとの事なれども。二人の夫は重ねじと世を捨て人となりさぶらふ。御身の事は盛久殿と故ある由傳へ聞いて候と。床夜の前を討ちししなく問うつ問はれつ今更に。スエテ袂つゆけくひぢまざる。地今一人の上臈なう聞くも語るも涙ぞや。我は無官の太夫敦盛の後家。大納言祐方が娘法名は法正賢と申す者。同じ所縁のフシ伴ひぞや。地此の所に相住し十念の柴の戸に。詞撮取の光明を拜み。地共に聖衆の來迎を。松葉折り焚き茶をわかし。オクリ涙の友とぞ。フシもてはやす。地時に向ふの峯よりも擔ひし柴も世を軽く。通れし僧と思しきが櫻が下に肩をかへ。同盛りの花をつくぐくと打眺め。エ、天晴能き薪ごさんなれと。腰の大鉈おつ取直し。色香満ちたる櫻木を情なくも根元よりゑい。く、代木丁々たり。詞人々驚きそれ何しやる。一輪散るも惜まれて佛にさへ折らで手向くる其の花を。なう狼藉やとありければ。彼の法師見向きもせず。主もなき深山木茶湯の薪に仕ると。地ちつとも厭はずどうど伐る今は堪へず走り出で。同衣の

袖に縋り。地薪を負へる山樵も花の蔭には宿るとよ。如何に出家の木の端も花には情知り給へ。薪は煙松ぞある。我等が庵の憂き住居。つらさを凌ぐ此の花ぞ。スエテ是非に。く、と止め給ふ。詞法師かぶりを振つて。何ぢや是を花なりとや愚かなりく。是がどこに花なるぞ。地今憂き世に花は無い其處退かれよと。鉈振上ぐれば引止め。ム、こゝは聞き處。斯く目の前に美しく咲いたる花を花でない。憂き世に花はないものとは扱御坊は悟の心か。地なうこれ柳は緑花は紅。花は花月は月と見るこそ誠の悟なれ。返答あらば申さ給へ。詞法師少し打萎れ涙ぐみたる氣色にて。全く悟る法師にあらず。憂き世に花は無いものぞエ、方々に。誠の花を見せざりし残念さよ。是なう。誠の花と申せしは。平家の公達無官の太夫敦盛の。地十六歳のお姿が。フシ誠の花でありしぞや。地武士の習ひは力なく。其の初花を手にかけて熊谷の成れの果。蓮生坊とは愚僧が事敦盛を失ひて。憂き世に何の花かある生中つらき櫻花。咲かせて物を思はんより。同じ煙に消えなんと持ちたる鉈をからりと捨てスエテかつばと伏して。泣き居たり。地人々夢とも辨へず扱は御身は熊谷入道か。是こそ敦盛の思ひ人祐方卿の御息女。是は誠か懐しやと。フシ縋り。付いてぞ泣き給ふ。地や、あつて法正覺いたはしの心根や。皆物思ひは

あるごとよ是こそ忠度卿の北の方。妾が庵の相住なり。又是なるは盛久の所縁曙と申す人。只今是へ來り給ふ我々は兎も角も。いとほしや此の人の途方なけなる有様を。あはれと見給へ熊谷殿とスエテ又さめ。くくと泣き給ふ。詞蓮生も涙を抑へ是も佛の引合せ。盛久の御噂豫てより承る堀土屋とは故朋輩疎略あらじと云ひければ。地曙も頼もしく。身の上語る人々のフシ縁の程こそ不思議なれ。なうこの文紙帳文枕は。平家の人々の筆の跡。昔の形見と起き臥し候地御覽せとありければ。曙も蓮生も扱なつかしや戀しやとスエテ縋り伏して歎きしが。詞蓮生涙に目をすり赤め。此の中に敦盛の御筆も候はん。一言の御情骨髓に徹つて忘れ難く。地餘り懐しさやる方なし。近頃わりなき事ながら。一心さへ通じなば夢にはなどか見えざるべき。是に一睡御許し候へかしと涙を流し申さる。地人々涙にくれながら實に道理いたはしや。せめて念を晴れ給へと各介抱し給へば。鬼のやうなる蓮生も戀にかきくれしをくと。紙帳の陰に轉び臥すやさしくも亦哀にて。過來し方の物語暫く。時こそ移りけれ。地爰に又小山の太郎武者宗重は堀土屋を諭言し。彌太郎を連れ下れとの上意を受け。方々を詮索し此の山陰に來りしが。詞由ある庵と内に入りこれく。此の所に平家の人々まします由方々にてはなきかといふ。

三人目と目を合せ。ハアいや左様の者は此の所には候はずと。言ひも果てぬに宗重ちやくと推し。ア、隠されそ聊爾はせず。鎌倉殿の仰にて女中がたに科はなし。世間廣くなし申せとの御使なりとぞ偽りける。地さすが女のうたてさは誠と悦び。然らば何をか包むべき。詞我々は敦盛忠度が後家御ゆるしの者なるが。地此の人は盛久の所縁曙と申す者。萬事は頼み奉ると言はせもせず飛びかゝり。曙が小腕引つ立て郎黨にかき負はせ。フシ行方知らず奪ひ行く。二人は怒つてやれ狼藉者。やれ情なやと追つかけ給へば立歸り取つて引つ伏せ。詞こりや曙これにあるからは彌太郎が行方知らぬ事はあるまじ。少しも陳ぜば此の太刀咽に突つ込み。地總骨を引裂かんと。目の上を振廻すは。フシ旁若無人の次第なり。地熊谷此の音に目を覺し。詞大欠伸して。紙帳より顔差出し。はつと驚き一文字に飛んで出で。宗重が襟がみ掴んでうしろばねにどうど投げ。地あたりを睨んで立つたるは。フシ心地よけなる勢なり。地宗重はふくく起き上り。詞ヤア熊谷か扱も久しや。息災なかと追従して紛らかす。蓮生につこともせず。いや畜生に近付は持たず朋輩を讒し剩へ女を捉へ尾籠千萬。サア命が惜しくば地に鼻付けて詫びことせよ。さなくば其處を一寸も去らせじと腕捲してかゝりける。宗重氣色を變へ。侍を畜生とは聞き

にくき雑言。我が儘吐かば出家とは言はずなあれ追出せ。地ッメ承ると郎黨一度にとつとかゝりしを。熊谷元來堪へぬ法師。いや丁稚ばら推參なりと。軒の松の木かいつかみ根際よりほつきと折り。麻を振るより軽々と大勢に割つて入り。四角八面打立つれば七人迄こそ薙き伏せけれ。此の勢に宗重は、フシ跡をも見ずして逃けて行く。地餘さじ洩さじ遁さじと麓迄追つかけしが。調エ、罪造りよしなしと走り歸つて南無三寶。曙を奪はれしと又駈け出でしが。地思へば跡も氣遣と。かけ入りかけ出で齒嚙をなして立つたりけり。調己れ愚人め天道知らず。此の法師があらんうち遂には奪ひ返すべし。大悪人の畜類ゆゑあつたら松の生木をば。よしなき事に捻ぢ折つた是も殺生さり乍ら。地セメ我が山に持ち歸り草木國土成佛の。十念せんと打擔け南無阿彌陀佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と呟きて新黒谷に歸りける。調出家侍頼もしとは扱此の。時にぞ知られたる。

第四

地堀の彌太郎近經は宗重が讒訴にて。勳功を黙され却つて御勘氣蒙り。丹後の國成合にフシ影を隠して居たりけり。地世間の様を窺はんと此の頃都に立出でしが。盛久歸依の御佛なれば彼の人

の現當我が無實の濁をも。清水寺の觀音にオクリ夜半に、忍びて、フシ參らるる。地星明かに雲稀に森々たる山嵐。高聲念佛大鐘の音羽の瀧より物こそ見ゆれと。見てあれば。調六尺ゆたかの大坊主大竹笠を阿彌陀笠に着そらし。裳なし衣に長刀柱のやうなる角の棒。弓手に突いたる有様はいづれ異相の法師なり。彌太郎はつと驚き。是や此の俗にいふ見越入道ごさんなれと。太刀に手をかけ間近く寄つてよく見れば熊谷なり。ヤア引御分は直實入道にてはなきか。ム、我は蓮生法師なるがさいふ和殿はたそ。ヲ、堀の彌太郎近經見忘れたかと言へば。蓮生杖をからりと捨てなに彌太郎か。扱々逢ひたかつたに珍しや。して先づ御邊は宗重が讒言にて流浪の身となつたるとな。殊に土屋の三郎まで逆臣一味と御勘氣の由。さこそ難儀察したり。就ては此の程宗重め洛中洛外をあばれ。大原の奥にて曙とやらんを奪ひ取つて下りたり。愚僧其の節行合せ下人輩二三人打殺してはありけれども。今少し遅くして助け歸せし無念さよ。こりやうろくする所でなし。身を碎いても言譯し。叶はぬ時は宗重と刺違へ死なんとお思はぬか。エ、側から見ても齒痒しく。地何時なりとも後詰は此の坊主と。昔を忘れぬ蓮生が、フシ言葉の末ぞ頼もしき。調彌太郎領きさすが好みなればこそヲ、過分。我もさは思へども何

をいうても鎌倉へ入られねば爲ん方なし。宗重に出會ねば存分違けんやうもなく。御分を始め世の人に腑がひなしとや笑はれん。地恨めしの君の御所存や。口惜しきは身の成る果と涙をはらはらと流しければ。鬼のやうなる蓮生もスエテ衣の袖を絞りしが。詞やれ彌太郎こゝに一つ談合あり。大原山におはします敦盛忠度の後家達を。忍ばせて關東に下し。鎌倉殿の御臺所へ只管慨き申しては如何あらん。ヲ、是ぞ屈竟萬事は貴僧を頼むといへば。ヲ、呑み込んだ諸事我等にお任せ。地然らば愚僧も後家達と同道して見え隠れに下り。首尾を見て便せん是も第一觀音力。猶しも守らせ給へやと伏拜みつゝ、三重へ別れけり。

法正覺道行

濡れぬ先こそ。厭ふべき。餘所の露さへ外ならず。衛士の焚く火の燃えさしに。所縁の煙立去らで。フシオクリ今はたへ咽ふ。我が身ぞや。フシ是も修業と。菊の前。安置の觀音負ひ參らせ。法正覺は先に立ち。スエテ腰に緑の柳の葉や。笠に挿いたも柳の葉の。熊野道者に出立し。道も隴の玉清水。フシ今を限と掬ひ捨て。都の名残。今日のひと。けに心なき深山木もオクリ我を見送る花の吹雪よの。滋賀の山越。打過ぎて。あのあまさがる遠方を。フシ我が行く空と見渡せば。心

細さぞ。勝りける。祇王祇女が戀衣。墨の袂に苦むして。スエテ嵯峨野の霜にやつれしも。我にはよもや及ばじと。過ぎにし方も身の上にひいて比べん。琵琶の湖波の調子もまばらにて。あはぬ浮名の。フシ高宮は。己が心よ小野の宿。しるしの石に物問はん。一夜二夜も苦しきを。九十九夜とのかね言は。スエテいかにつれなき小町塚。往き來の人の手向草。フシ袖とくや。摺針の。スエテ峠はるく眺むれば。冥途の鳥の初時鳥死出の。便りの。合山風吹かば。文を越路の海見えて。末は霞に果しなく歌いと心。沖つ白波。小オクリ波は敦賀の磯に打つとよの。いやフシ現なき。檜原葎原分け行けば。蟻子といふ蟲戀知らず針ある草にいと白き。足はさながら。合フシ紅鹿子。いふにいはれぬ髪なれど。風のむすほれ櫛取りて野澤の。水に影見れば。水際に。咲ける。フシ澤潟の。面はづかしや。面はゆや昔の姿色失せて。窠れ果てたよ我が身こそいや我が身こそ我こそと。水憎ましくかき濁すスエテ杖投げ捨てて。ア、憂き世。いらぬ物よと目に浮ぶ。フシ涙やさしく哀なり。旅の狭衣木曾川の。濡木も我も朽ち果てて。裳裾ほろほろ、打つ聲もあさ野の雛雉子幼雲雀の。雲に消えとんと。落ちては。又ちりりと聲の。せはしく。上りつ下りつ。はねも心も輕井澤。登り下りて坂本の。去年の氷柱に水くゞる岩間。

岩間に。しつかとく／＼かをり／＼／＼来る。梅の花は折るまいか。開いたもござる。蓄んだもござる。嵐吹かねど一枝二枝手折らばの。折取り／＼。枝折の花ぢや。ほどに、フシ土産も。誰かあるじと、松枝や泊りは名のみいたづらに。いつの杣木に引きそめしスエテ我が宿ならで軒端聳く。板鼻の。宿にぞ着き給ふ。地。向ふを見れば大幕打ち兵具ひつしと飾らせ。關所と思しく大木戸打ちいかさま嚴しく構へたり。されども二人遠慮もなく御免といひてつと通る。番の者ども棒十文字に入れ違へ。大事の關所手判なくては通さぬといふ。いや我々は修行者何の様子も存ぜぬが。して何故の關ぞとあれば關守椽端に立出で。これ／＼合點行かぬは道理。此の度堀の彌太郎謀叛なる故。鎌倉の口々に新關を据ゑられ。此の所は則ち宗重殿の承り。かういふ我等は彼の御家來成瀬平内岩上權藏。近頃不便な事ながら通す事はならぬといふ。地。法正覺聞き給ひ。殿様のお詞とも覺えず。彌太郎を止むる關ならば彌太郎を止め給はで。我々は熊野比丘尼如何な關所も御免の者。柳の葉は入りませぬか、フシちとくわん／＼とぞ仰せける。關權藏浮氣者にてヤア熊野比丘尼とや。扱々大事ない者どもかな。定めし歌もなるであらう。小唄着に飲みかけばどうもなるまい。なんと平内いやかといへば平内堅い者にて。はれ藥袋もない。

これ／＼旅人。熊野比丘尼は髪をば根より剃りこぼす。其の方たちは有髪の體心得難しと咎めた。さん候我々は三つのお山に年籠り。難行の山踏みに髪剃る違もあらばこそ。御本尊再興のため鎌倉へ通る比丘尼に紛れ候はず。地。こちらな殿様よい殿ぢや。フシさあ通してやとありければ。權藏を始め若黨足輕氣を浮かし。さつても見事な丸太ども髪の長い角ものか。關の柱もいらぬもの打破つて通せやと。フシさ、めき合ふ事限りなし。平内眼に角を立て。關大事の前的小事粗忽して我々に。痛い腹を切らするか。通す事叶はぬとはつたと睨み。これさ旅人ども。汝等が體合點行かず。但し熊野比丘尼が定ならば六道の繪圖あらんとく／＼出せ。地。さなきに於ては己ればら。搦めとむると怒りしは。フシにが／＼しくぞ見えにける。地。痛はしや人。人は。今ははや詮方なく目と目を見合せおはせしが。ヲ、思ひ當りて菊の前。庵の床に張り付けし九品十界の繪像御厨子に疊み入り給ふ。これ幸ひと取出し。關なう／＼關守たち。尼法師の言葉とて疎かになし給ひそ。皆これ佛の口眞似ぞや。又もや雜言し給は、忽ち其の舌八つに裂け。大地も割れて生きながら奈落に墮罪し給はんと。地。口には嚇し心には南無や千手觀世音。左右なく此の關通してたべ大慈大悲と觀念し。關の戸に繪をかけてオトリ語らせ。給ふぞ。フシ

殊勝なる。

比丘尼地獄の繪とき

そもく往生極樂の雲の臺に法の花上品蓮に浮ぶ事。此の世の此の身此の儘に取りも直さず佛す去此不遠とは、フシ説かれたり。かばかり近き極樂も。作りし罪が鬼となり。地心の劍身を責むる。一百三十六地獄。無間叫喚阿鼻永沈。此の世の色はあだ花の情の。涙流れても。焦熱の火は消えやらず。連理の衾暖かに。スエテ比翼の床を重ねても。紅蓮の氷は解け難し。そもや人間一人は三世の諸佛苦みて。造り立てんとし給ふを。十月に足らで下ろし兒の。諸佛一度に聲を揚げ。スエテ歎かせ給ふ御涙。フシ流れて。瀧つ血の地獄。火焰となつて身を焦す。地さて其の次は小夜衣。わが妻ならぬ邪淫戒。嫉妬の煙妬の焰。僧を落せし女の罰。比丘尼を犯せし男の罪。無明の馬の毛をふるひ。ハヤメ愚鈍の牛が角を振立て六道四生をくるりくと因果はここにめぐり車の。フシ我からと。スエテかひも涙に伏し沈む。地是は又生ますの地獄。竹の林に衰へて影も。よろくたよくと。辿り。よろばふ哀れさや千筋の。燈心たぐりもて。フシ心の闇に。くれ竹の。歌竹の根を掘るしの竹の。杖にすがりて。フシ泣くばかり。暗しや辛し。冥閻城。

そもこの苦患と申すは娑婆にて人の目をくらし。科なき人を牢に入れ。地又關の戸の關守よ。往き來を惱ます其の報い。四方は石の門に五體を責められ。五色の鬼が夜に三度日に三度。時こそ來れと呵責をなす。コハリ土は精劍山は鐵城。五百生々盡きせぬ因果弓取とても止らず。力ありとて頼まれず疑ひ給ふなナホス人々と。無量の辯舌淀みなく。フシ語り給へば關守は。地此の讚歎に恐れをなし。上下慄き身を顛はし色を。變じて見えにける。地平内權藏身の毛を立て有難き聽聞皆身の上に覺え候。佛とも法とも辨へぬ後生こそ恐しけれと。地思ひく奉加してはや通られよと申しけり。二人は悦び詞多くて悟られじと。一念發起目出度しく。お暇申すといひ捨て、早足に通らるる。同時に下部の中よりも。跡なる比丘尼止れとこそ。正しういつぞや下りつる忠度の御臺。菊の前と呼ばはればそれ餘すなと無體に取つて引戻し。ヤイサそけめ等。大分の男をよくもくたばかり。剩へ盜人に追ひとやら。した、か奉加を取り込み腹切らせうとはしつるよな地これ目前の地獄ぞと散々に打ちけるは。フシ目も當てられぬ次第なり。地二人はわつと聲を上げ。己れが主の宗重惡心の餘り。曙を奪ひし其の怨みを晴らさん爲。かく迄しつらひ來りしに口惜しや今ははや。佛の綱も神の綱も。切れ果てし無念さよと。フシ聲も。

おします泣き給ふ。蓮生法師は一日路跡にさがつて見え隠れに下りしが。胸こそ騒げと大汗になり飛ぶが如くに驅け來り。南無三寶といふより早く關屋に飛び入り。あら暑やと仁王立にぞ立つたりけり。平内權藏腹を立て。いづくの寺の鉢ひらきぞそれ追出せと怒りけり。蓮生ちつとも臆せず。いや苦しからず熊谷入道といへる芋搦坊主。此の上臈は敦盛の後家法正覺。忠度の後家菊の前。兩人共に鎌倉殿の御許し誰怖いものはなけれども。宗重めが讒言にて新關ある由傳へ聞く。とやかく詮議も面倒しく。姿をかへさせ下せしに此の狼藉は何事ぞ。彌太郎ばかりで讒言がしたらぬか。大原山にて曙を取返さぬ口惜しきに。其處を放せ放さずば地一掴みひしがんと。どうど踏んだる足音は。陸地も揺ぐばかりなり。平内權藏こゝろくりに。仔細は知らず我々も主命なれば一人も通す事はならぬといふム、扱は愚僧を侮るか。此の熊谷が頭の毛は剃つたれども力けは剃らぬなり。地いで物見せんと關の門おつ取つて。二人が頭に閃かしさあ通すか通さぬか。微塵になさんと振廻る誰かは異議に及ぶべき。ひれふし屈んで居たりけり。詞ヲ、よい思案上分別。さあ此の上は鎌倉迄足休めをさせ申さんと。地達者に見えし若侍二三人引つ立て姫たちを負はせ參らせ。己れは又佛肩にかけながら大の男に打乗つ

て。高けれど御番衆是から御暇申すべし。地ツメさらばおさらばはいくく打立て。く急ぎける獅子の勢虎のせい。詞けに熊谷と名にし負ふあつばれ。稀代の法師なり。

第五

地桐ヶ谷の座敷牢川越の重房預りて。さしも殿しく盛久は。今日の命も白玉の緒の絶えなん事は厭ひもせず。科なくして堀土屋我ゆる冤罪に沈む事。此の殃難を救ひ給へと毎日三十三遍の。讀誦につる、鳥の聲。フシ草木も法にや逢ひぬらん。地爰に鸚鵡といふ鳥の。始めが程はお經を口眞似して啼きけるが。後は覺えて膝の上机の邊怖ぢもせず。盛久と同音にスエテ吟を揃へて斯くもなん。ハヤメテ妙法蓮華經。觀世音菩薩普門品第二十五爾時無盡意菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩。地盛久涙をはらくと流し。有難や汝無念無智の小鳥として。かく御經に傾く事人間物を知らぬなり。憂き年月の牢住居汝を友と暮せしぞや。近き内に某は誅せられん。亡からん跡はなほしも御經讀誦し。我をも助けお事が又畜生界を免れ。共に浄土に生るべし名殘惜しやと泣き給へば。頭をうな垂れ羽末をつき。涙を流す有様にいと名殘の脇息。押遣り膝に抱き乗せ。フシしばし消え入り泣き給ふ。地かゝる所へ重房牢の戸を開き

惶しくつつと入り。御分の最期今日と仰出され。狩野之介が太刀取り我等は檢使承る。知らせ申すと申しける盛久聞き給ひ。あつばれ疾う斬らればやとの念願扱は叶ひて候よ。地只御情に片時も早くと宣へば。鸚鵡は聞入れ盛久の肩に止り手に据り。羽もしをれて歎きしが飛びかゝつて重房が。左手の頬先したゝかに突いたりけり。重房やがて引つ掴み。捻ぢ殺さんと押付くる盛久あわて縄り付き。是は此の程御覽の如く我等に懐きし。鳥類のあさましさ眞平と手をすり給へど重房ちつとも合點せず。畜生の業とは言ひながら面に創を付けたれば。其處退かれよと押退くる。扱はふつと叶ふまじきか是重房殿。盛久は三の寶を持つて候。一つには命二つには此の鳥。三つには本尊此の本尊と申すは。清水寺の觀音より夢想に受けし。閻浮提金の千手の像冥土の土産と存すれども。地是を代に參らせん平に許して給はれと。錦の袋より彼の御本尊を出し給へば。重房流石信ある男子にや。是は幸の結縁形見といひ回向の種と本尊を授りて。御扱御最期は未の刻後程御目にかゝらんと。地表を指して出でければ。盛久鳥は助けても。御本尊の御名殘包み。かねたる三重の涙なり。フシさる程に。地幕下將軍頼朝卿鶴が岡の御社參とて。諸武士残らず御供あり勅額の鳥居に着き給ふ。御爰に神木の太銀杏に怪しき鳥の羽を休

め。刀尋段々壞とぞ囁りける。君を始め供奉の上下是は不思議と見る所に。宗重御馬に添うたりしが。したり顔に進み出で。總じて世界に不思議といふは無い事なり。明さ暗さを御覽に入れんと御隨身が持つたる。弓矢おつ取つて暫し固めて切つて放せば。過たず鳥の火打羽はぶしをかけてひいはたと中りしが。地宗重忽ち悶絶し弓矢投捨て。手足を縮めのりかへる下郎ども断け付けて。からき命をやうく様に様々助け介錯し。フシとある坊にぞ入れにける。地我が君立寄り御覽あれば。あら有難や閻浮提金の千手の像。尊體に矢中つて。光を放ち立ち給ふ歴劫不思議といひつべし。君御袂に守り奉りステ上下。あつとぞ禮拜す。地かゝる所へ川越の重房狩野之介。盛久を誘引し大息ついて參上し。御仰せに任せ盛久を誅せんため。引出し候へば盛久が身より光を放ちて。振上けし太刀三口迄段々に折れて。斯の如しと御前に差上ぐる。我が君御手をはたと打ち。豫て盛久は信者と聞きしが。よつく觀音の惜ませ給ひて刀尋段々壞疑なく。只今の靈驗同じく大士の御告ぞや。此の御佛に覺えやあるとの御説なり。盛久夢の心地してハア是は我等の守本尊重房に與へし有様言上し。地再び拜する有難さよとステ地にひれふして泣き居たり。地頼朝重ねて信あれば徳ありとは。目前の理佛の助け給ひしを。頼朝討つべ

きやうもなし。盛久命助け置くと御説なり。盛久頭を地につけ。平家の恩を振捨て源氏の恩を受けん事。侍の素懐にあらす。只御慈悲には切腹をと残るかたなく申しける。然る所に蓮生法師。菊の前法正覺を打連れて一散にかけ來り。何れも御免候へ熊谷坊主を御見知り候べし。只今は阿彌陀と申す主を持ち。諸國勸進仕る如來申し越されしは。佛法繁昌して惡人少く地獄衰微に及びたり。小山の宗重といふ惡人は奉加し給ふべし。さあ請取つて歸らんと憚りなくぞ申しける。頼朝驚き給ひ。興がる言ひ分して宗重を惡人とは。何を以て申すぞ蓮生からとと笑ひ。なう科なき堀土屋を諭言し。御褒美にあづかるは惡人に候はずや。サア宗重を賜はるかさなくば愚僧も一所に相果て。一念の惡鬼となり鎌倉を闇にせん。有無の御返事承らんと血筋をいら、け血眼に成つて申しける。頼朝聞召し。某が爲を存じて注進せり讒言といふ證據なし。よし堀土屋に科なくば勸氣を許さん。いづくにあるぞと宣へば間部の六彌太進み出で。兩人共に私宅迄。夜前忍びて罷り越し候とやがて使を立てらる。いやこれ堀土屋は其の身に科なければ。強ち御免を忝しとは存ぜず。只宗重を賜らんと申し切つてぞ居たりけり。地かゝる所へ曙は人目も恥ぢず駈け來り。自らは盛久に所縁あけほのと申す者。宗重仰と偽り奪ひ取

り。妻にせん女夫になどと申しかけ。明け暮迷惑仕ると涙を流し言上す。頼朝大きにせかせ給ひ。扱は讒言に極つたり上を掠め。人を惱ます佞人それ搦め取れとせき給へば。御徒士の衆駈け入つて。三寸繩に縛り上げ御前に引出す。扱堀土屋を召出され。汝等が心任せに行ふべしとの御説なり。同時に蓮生つと出で扱かたんに無心あり。づたくに刻みて飽き足りはなけれども。茲が出家の役なれば命は貰うた。頭を剃つておつ放さん。ヲ、兎も角も御邊次第と申さる。地いで行へと押伏せ。無儀に剃つて剃りこほし。赤裸にして衣裳を負はせおつ放せば。宗重頭を撫でて見て。誠に首の代りに髪を剃るとは大きなお負け有難し。なう蓮生坊。此の御禮には若し黒谷に萬日など遊ばさば。地何時なりとも鉦はりに參らんと。怖めぬ顔して申しける。それへらず口追つ拂へと。棒を以て追ひ散らし。上下はつとぞ笑ひける。頼朝仰せ下されしは。時こそあれ八幡の御前にて國を亂す佞人顯れ。殊に稀代の御本尊頼朝授かり申す事。地なほ萬歳のためしぞと御悦び淺からず。各残らず御褒美あり。當つて碎くる御政道。尤とこそ聞えけれ。地重ねての御説には。それ觀音の御利益慈悲を以て誓願とし給ふ。此の度源平の戦に人多く討たせし滅罪の爲。且は源氏長久のため此の鶴が岡に。千羽の鶴

を放ち頼朝を始め。諸大名の面々家々の系圖を寶殿に納め。地子孫長く氏神のしるしとせん。盛久も今よりは源氏に致すべしと。源氏の姓を賜りいづれも用意仕れと。やがて還御成りければ有難し目出度しと。退出しける盛久が心の内こそ三重のゆしけれ。既に其の日に。地成りしかば君も岡邊に御出であり大名小名残りなく。雲を列ねて花を折り。千羽の鶴に金銀の札を付け。千代の印の放鳥。神も心や勇むらん。地藤九郎盛長今日の御役承り。芹川の例を引き態と烏帽子はかけざりけり。檜櫃すりたる袖單衣かざす若松若やかの。同朋二人從へて。君が千歳のかす鳥やスエテ濱邊の砂に伺候する。同時に源氏の御系圖柳宮に据ゑさせ如何に盛長。高らかに讀み上げ御寶殿にこめ奉れとの御説なり。地藤九郎承りスエテ押戴いて。拜見す。

源氏大系圖

そも源家一流。正統の血脈。恭しうして其の水上をかながみれば。此の國の天位五十餘りむつまじき。神と君が代清和の皇。第六の皇子四品貞純の親王。桃園と號し奉る。其の御子。鎮守府の將軍經基の親王。源の姓を賜りし六孫王これなり。此の時に當つて菊の紋を改め。龍膽を以て永く源氏の定紋と定め。水の源白旗の。靡きく限りなく。ハルフシ是を源氏の。

元祖とす。其の御子前の津の守多田の滿仲。武功ゆしき名將なり。第四の御子河内守頼信。伊豫守頼義其の。御子八幡太郎義家。御舍弟新羅三郎義光より。分れく。陰繁き。武田佐竹も。同じ枝葉を連ねたり。逸見秋山小笠原。ハルフシ岡田石川森加賀見。淺利八代田中の一黨。一條板垣此の御代よりぞ分れる其の御子。從五位上義國これ。此の。足利の先祖として。里見鳥山大井田大館大島黨山名細川。仁木荒川吉良石堂。一色今川皆これ當家の。庶流ぞかし。扱御祖父は。義家の四男。六條の判官爲義嫡流續いて。前の。左馬の頭義朝公内大臣は。贈官なり。それより當君源家中興の武將。六十餘州の總追捕使。正二位大納言右近衛の大將。征夷大將軍。源の朝臣頼朝卿。忠孝の德譜代して。弓箭の功連綿せり。且は和漢の名將。又は扶桑の鹽梅彼といひ。フシ是といひ。天のなせる名君地に奉ぜる良將。君々たれば臣々たり。扱其の次は北條のコハリ系圖なり。一品葛原の親王第二の宮。無品高見の大君其の御子。高望の大君に始めて平の姓を賜り。嫡子良望貞盛が二男從五位下。維將五代の後胤時方が嫡孫。遠江守時政今天下の大老。將軍ナホス家の御外戚四たう。補佐の執權。金田相馬も是より分れ。上下に交る水魚の臣とやは又。フシ秩父が家傳の一卷なり。桓武六代忠頼が孫。秩父の別當武基。

武綱。重。綱。重弘重能が一子。畠山の庄司二郎重忠。古今の大力弓馬の達人内典外典の博學。民を憐む仁義の雨。君子の徳の春風に。民の草葉はさつ／＼。さつても名高く打寄する波の。三浦の。フシ先祖を問へば。忠通が末葉三浦の平太夫爲通。其の弟權の太夫景通。これ梶原の元祖にて。景時に三世の父權五郎が兄なり。板木の四郎義宗が一子和田の左衛門義盛七代の王孫たり。扱又千葉は秩父の一家。千葉之介忠常より常胤迄は五代とかや。土肥は平家の一流堀も土屋も三浦の一黨。佐々木源氏は宇多天皇。赤松は村上源氏大江の廣元在原氏扱其し外紀氏橋藤原清原。中原菅原大中臣。大名官家七百人御家人は八萬餘騎。残らす系圖を籠め奉り源氏繁昌君臣和合。萬歳呼ばふ松風と扇の風にナホス。翻へす袖に戯れ千羽の鶴。一度にばつと立上り霞を分けて。三重。鶴の舞地ツ。雲井にのしばのひら／＼。くるり／＼と舞ひ遊ぶ萬代ふかき鶴が岡。源氏の御代の名に負ひて今の御代より末の代も。五穀豐饒民安全治まる。國こそ豊かなれ。

右此本者依爲懇望文句音節等
悉校合加秘密令開版者也

- 竹 本 筑 後 掾
- 山 本 九 兵 衛 板
- 大阪高麗橋壹丁目
- 山 本 九 右 衛 門 板

近松門左衛門全集第三卷終

大正十一年十月十五日印刷
大正十一年十月十八日發行



(近松門左衛門全集第三卷)

定價金貳圓五拾錢

編纂者 高野辰藏

發行者 和田利彦

印刷者 土谷清隆

印刷所 株式會社博文館印刷所

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地

春陽堂

振替東京一六一七 電話本局五十一四二〇一

圖書目錄贈呈……往復葉書にて御申込次第 春陽堂

高野斑山氏 校訂 三六判布表裝天金本
黒木勘藏氏

近松門左衛門全集 全十卷

各卷 金貳圓五拾錢 送料拾貳錢

此全集の集

輯集の豊富……淨瑠璃と歌舞伎狂言と合せて百四十篇。其三十篇は未
翻刻の珍書。
歌舞伎狂言本十六篇……近松の作の一面を示す貴重品。本全集の誇。
底本は古刻……一切古正本に據り、異本を参照して、従前の翻刻書に
基かず。
校正の嚴密……假名遣の訂正、佛語漢語に對する用字の正格（但訛語

七特色

方言は元の儘）句切及び曲節附の保存。
挿繪の珍貴……繪入細字本及び狂言本から採つて、每卷挿入十數葉。
場面想察の好資料。
作品の排列……内容と傍證とによつて、新に立てた時代順。最も苦心
の存する處。
研究の手引……劇の歴史、作者の傳記、著作の解説。（序卷）

序卷

義太夫劇の日本劇史上に於ける地位、近松門左衛門の傳、著作年表、著作の解説並
に梗概。

第一卷

元祿四年迄

花山院后譚、赤染衛門榮花物語、つれづれ草、世繼曾我、伊呂波物語、門出八島、
凱陣八島、源氏烏帽子折、百夜小町（狂言本）、夕霧七年忌（狂言本）、出世景清、三
世相、佐々木先陣、曾我七以呂波、天智天皇、十二段、水木辰之助錢振舞（狂言本）、
大覺大僧正御傳記、東山殿子日遊、戀塚物語。

第二卷

元祿十一年迄

念佛往生記、本朝用文章、日本西王母、摩耶山開帳(狂言本)、今川了俊、松風村雨束帶鑑、釋迦如來誕生會、鎌田兵衛名所盃、傾城阿波鳴門(狂言本)、賴朝伊豆日記、根元會我、團扇會我、當流小栗判官、一心二河白道(狂言本)。

第三卷

元祿十五年迄

一心五戒魂、傾城佛の原(狂言本)、阿彌陀池新寺町(狂言本)、浦島年代記、姫藏大黒柱(狂言本)、傾城富士見里(狂言本)、下關猫魔館、蟬丸、天鼓、會我五人兄弟、大磯虎稚物語、賀古教信七墓廻、傾城壬生大念佛(狂言本)、薩摩守忠度、主馬判官盛久。

第四卷

寶永三年迄

傾城三の車(狂言本)、最明寺殿百人上臈、會根崎心中、唐崎八景屏風(狂言本)、薩摩歌、吉祥天女安産玉(狂言本)、雪女五枚羽子板、用明天皇職人鑑、源義經將基經本領會我、加增會我、心中二枚繪草紙、兼好法師物見車、碁盤大平記、卯月紅葉、會我扇八景。

第五卷

寶永七年迄

吉野忠信、堀川波鼓、卯月の潤色、酒吞童子枕言葉、心中重井筒、傾城反魂香、心

中萬年草、待夜小室節、淀鯉出世瀧德、五十年忌歌念佛、御曹司初寅詣(狂言本)、槍狩劍本地、會我虎が磨、今宮の心中、百合若大臣野守鏡。

第六卷

正徳三年迄

心中刃は氷の朔日、孕常盤、夕霧阿波鳴門、源氏冷泉節、吉野都女楠、大職冠、傾城懸物揃、弘徽殿鷄羽產家、廻山姥、長町女腹切、傾城吉岡染、天神記、察靜胎内拵、冥途飛脚。

第七卷

享保三年迄

相摸入道千匹犬、娥歌加留多、嵯峨天皇甘露雨、大經師昔曆、持統天皇歌軍法、生玉心中、國性爺合戰、國性爺後日合戰、槍の權三重帷子、聖德太子繪傳記、山崎與次兵衛壽の門松、日本振袖始、會我會稽山、傾城酒吞童子、日本振袖始(狂言本)。

第八卷

享保九年迄

博多小女郎波枕、善光寺御堂供養、本朝三國志、平家女護島、傾城島原蛙合戰、井筒業平河内通、雙生隅田川、日本武尊吾妻鏡、心中天網島、津國女夫池、女殺油地獄、信州川中島合戰、唐船嘶今國性爺、心中宵庚申、關八州繫馬。

第九卷

補遺の卷 悉皆未翻刻書

21052
VA

紅葉全集

尾崎紅葉氏著

合判七五〇頁位美本
各貳圓五十錢送料拾八錢

本集は明治文壇第一の巨匠として我が國文學史上に不朽の名を刻まれたる尾崎紅葉氏の全作品を収録せるものである。氏が、江戸藝術の精粹を捉して、渾然たる新文藝を建設し、我が文運に新生命を與へたその功績は、紅葉氏の所謂「七度生れて文章のため盡さん」と云ふ包懐ありて始めて得べきものであつた。

- 第一卷 多情多恨、夏瘦、關東五郎、むき玉子、新色ざんげ、手引の糸、命の安賣。◇第五版
- 第二卷 三人妻、女の顔、花ぐもり、浮木丸、西洋娘氣質、煙霞療養、偽金、わかれ蚊帳。◇第五版
- 第三卷 伽羅枕、男心、此ぬし、戀の病、文ながし、千箱の玉章、草紅葉、八重襟、伽羅物語。◇第三版
- 第四卷 寒牡丹、おぼろ舟、安知歌不林、不言不語、紅白毒餿頭、油杓杓、新油柄、杓、心中船。◇第三版
- 第五卷 隣の女、青葡萄、夏小袖、心の闇、冷熱、紫、東西短慮又、茶碗割。◇第三版
- 第六卷 金色夜叉、銀、鷹料理、三筒條、猿枕、湯の花。◇第三版

505

58

終